千葉県教育振興財団調査報告第569集

主要地方道成田安食線
地方道道路改良事業
埋蔵文化財調査報告書
Ⅲ

－成田市押畑広台遺跡－

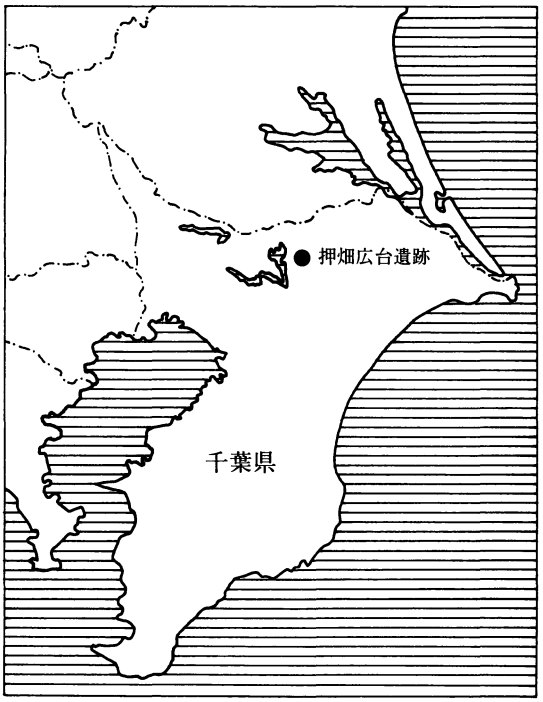
平成19年3月

千　葉　県　県　土　整　備　部

財団法人　千葉県教育振興財団

主要地方道成田安食線
地方道道路改良事業
埋蔵文化財調査報告書
Ⅲ

－成田市押畑広台遺跡－



序　　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第569集として，主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴って実施した成田市押畑広台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

調査では弥生時代から奈良・平安時代に至る竪穴住居跡や中・近世の墓域が検出されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり，この報告書が埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として活用されることを願っております。

終わりに調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関，また発掘作業から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年３月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長　岡野孝之

凡　　例

1　本書は，千葉県印旛地域整備センター成田整備事務所（旧成田土木事務所）による主要地方道成田安食線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は，下記の遺跡を収録したものである。

　　押畑広台遺跡（遺跡コード211－065）　千葉県成田市押畑字広台1706－3ほか

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は千葉県印旛地域整備センター成田整備事務所の委託を受け，財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業担当者は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は上席研究員　鳴田浩司が担当した。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，千葉県印旛地域整備センター成田整備事務所，成田市教育委員会ほか多くの方々からの御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は下記の通りである。

　　第３図　国土地理院発行　1/25,000地形図「成田」（NI－54－19－11－１）平成17年

8　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による平成14年撮影のものを1/10,000に引き伸ばして使用した。

9　本書で使用した図面中の座標値は世界測地系を基準としたもので，すべて方位は座標北である。
座標数値はTKY２JGDver1.3.7g変換パラメーター ver2.1.1によるJGD2000系の座標値である。

10　遺物中の赤彩については粗い目のスクリーントーンを，黒色処理については細かい目のスクリーントーンをそれぞれ処理か所に貼付した。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに
1　調査の経緯と経過……1
2　調査方法……1
3　遺跡の位置と環境……3
Ⅱ　調査成果
1　旧石器時代……5
2　弥生時代後期から古墳時代前期……5
3　古墳時代後期……10
4　奈良・平安時代……20
5　中・近世……25
Ⅲ　まとめ……35
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　確認調査範囲とトレンチ，グリッド配置図……2
第２図　遺跡全体図……2
第３図　押畑広台遺跡と周辺遺跡位置図……4
第４図　2C27グリッド東壁面柱状図 ……5
第５図　古代遺構配置図……7
第６図　SI-004……8
第７図　SI-006……9
第８図　その他出土遺物……9
第９図　SI-001（1）……12
第10図　SI-001（2）……13
第11図　SI-001（3）……14
第12図　SI-001（4）……15
第13図　SI-003（1）……17
第14図　SI-003（2）……18
第15図　SI-007……19
第16図　SI-002……21
第17図　SI-005……21
第18図　SI-008（1）……23
第19図　SI-008（2）……24
第20図　その他出土遺物……24

第21図　カワラケ……24
第22図　石製品……24
第23図　中・近世遺構配置図……28
第24図　土坑・土坑墓・土坑列……29
第25図　銭貨拓影図（1）……31
第26図　銭貨拓影図（2）……32
第27図　銭貨拓影図（3）……33
第28図　銭貨拓影図（4）……34
第29図　全体遺構配置図……36

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺航空写真（１/10,000）
図版２　遺跡遠景，調査地点，西側全景
図版３　SI-001遺物出土状況，SI-001全景，SI-001カマド
図版４　SI-002全景，SI-003全景，SI-003貯蔵穴内遺物出土状況
図版５　SI-004全景，SI-005全景，SI-006全景
図版６　SI-007遺物出土状況，SI-007覆土土層断面，SI-007全景，SI-007炉跡１・２
図版７　SI-008遺物出土状況，SI-008全景，SK-011～013，SI-008カマド内遺物出土状況・カマド
図版８　SK-001，SK-002～006・008，ピット群，SD-008，SD-001，SK-006，SK-010
図版９　SD-002，SD-003・005，SD-006
図版10　SI-001遺物
図版11　SI-001遺物
図版12　SI-001・002・003・004遺物
図版13　SI-004・005・007・008遺物
図版14　弥生土器，石器
図版15　墨書土器，須恵器，カワラケ，土製品，石製品
図版16　銭貨
図版17　銭貨，鉄製品

表

表１　出土銭貨一覧……30

Ⅰ　はじめに

1　調査の経緯と経過

千葉県土木部（現県土整備部）は，緊急地方道路整備事業の一環として主要地方道成田安食線において道路整備計画を策定したが，当該事業地内に埋蔵文化財が所在することから，その取り扱いについて関係諸機関で協議した。その結果事業の性格上記録保存することとなり，財団法人千葉県教育振興財団では，千葉県教育委員会の指導のもと，千葉県成田土木事務所（現印旛地域整備センター成田整備事務所）と委託契約を交わし平成14年度に発掘調査を実施した。

調査地点には墓地があり，まず墓地移転先の調査を先行して実施し，その後古い墓地に埋葬されていた遺骨を収集し，作業完了後移転前の地点の調査を実施するという段取りを採用した。したがって，遺骨収集にかかる５か月間調査を中断した。

そして，平成18年度には調査地点の整理・報告書刊行を実施した。

押畑広台遺跡の発掘調査および整理作業の期間及び調査体制は以下のとおりである。

平成14年度

期　間　平成14年７月１日～平成14年７月31日
　　平成15年１月７日～平成15年１月31日

組　織　調査部長　　斎木　勝
　　東部調査事務所長　　折原　繁
　　担当職員　研究員　　永塚　俊司

内　容　発掘作業　　対象面積　　1,300㎡
　　確認調査　　上層　130㎡／1,300㎡
　　下層　　28㎡／1,300㎡
　　本 調 査　　上層　650㎡
　　下層　　0㎡

平成18年度

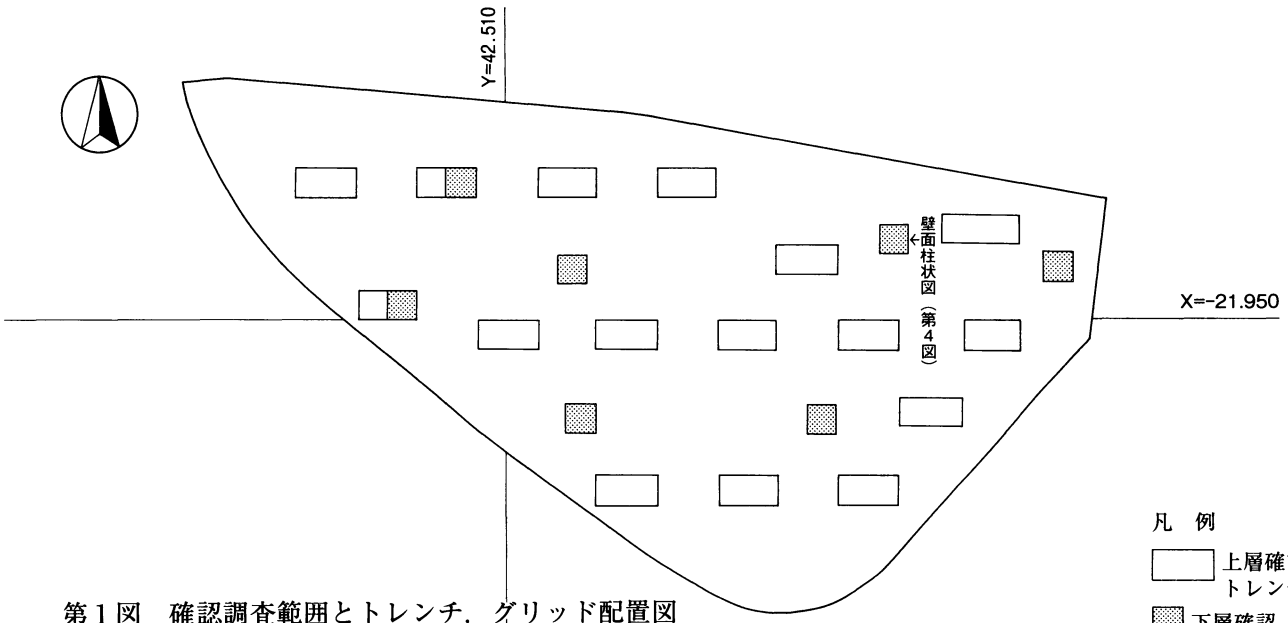
期　間　平成18年８月１日～平成18年11月30日

組　織　調査研究部長　　矢戸　三男
　　北部調査事務所長　　古内　茂
　　担当職員　上席研究員　　鳴田　浩司

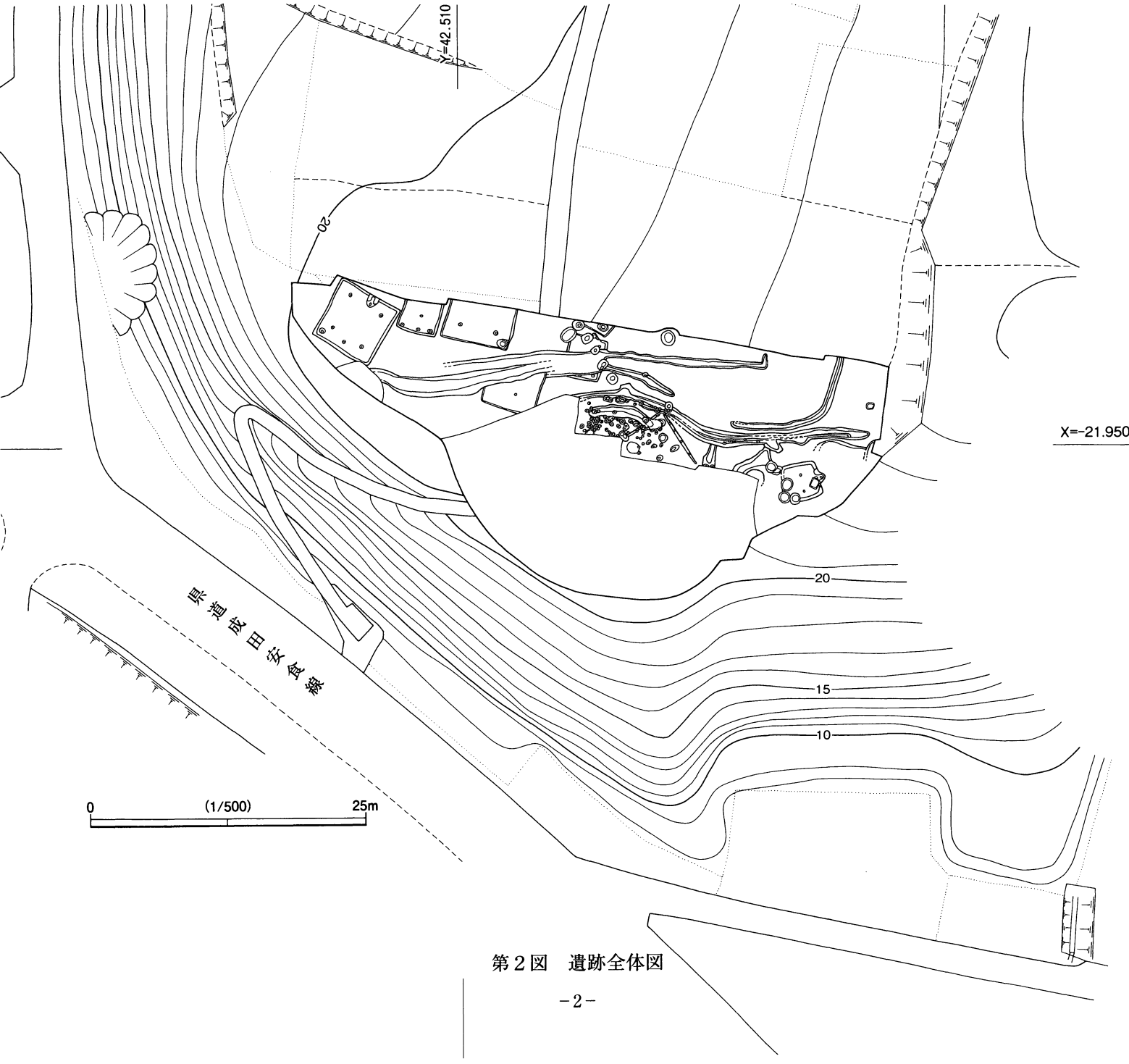
内　容　整理作業
　　水洗・注記から報告書執筆・刊行

2　調査方法

調査対象とする地点を含む台地先端に公共座標（世界測地系）の網をかぶせ，基準点測量を実施した。基準となる座標1A00はX＝－21.920，Y＝42.480で，20m×20mを大グリッドとした。そこから東方向に順にA，B，C，Dを付し，南方向に順に１，２，３の数字を付した。さらに大グリッドを10×10に100分



第１図　確認調査範囲とトレンチ，グリッド配置図



第２図　遺跡全体図

割し，２m×２mの小グリッドを設定しこれを最小単位とした。

調査は５か月の中断期間をおいて前期・後期の２回に分けて実施した。

前期調査では上層確認の結果台地平坦面ほぼ全域に集落が展開することがわかった。しかし，後期の調査では，すでに墓地造成時点で地山を掘削されており，墓地移転に伴う遺骨収集によるさらなる掘削により遺構は検出されず確認調査で終了となった。本調査では，弥生時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡や中・近世の土坑墓，溝状遺構等を検出した。下層確認は，立川ロームが残る地点に対しておおよそ２％の割合で実施したが，遺構・遺物とも検出なく，確認調査で終了した。

3　遺跡の位置と環境

調査地点は印旛沼の東側に展開する台地のさらに東方，利根川に流入する根木名川支流の小橋川によって開析された台地縁辺に位置する。南西方向の眼下には小橋川によってもたらされた土砂上に谷津田が展開する。小橋川最上流では成田ニュータウンの大規模宅地造成や成田旧市街地の拡大に伴い近年開発が著しい。調査地点は水田面より比高差10m余りの崖面を葛籠織りの急な道を上るとすぐの地点にあり，地元押畑地区の墓地となっていた。

主要地方道成田安食線関連ではすでに印旛郡栄町内９遺跡[1]，成田市内７遺跡８地点[2,3]の発掘調査を実施し，それらはいずれも調査報告書が刊行されている。そのうち弥生時代については当該期の遺物が若干出土しており，今回の調査が成田安食線関連の遺跡としては２例目となる。周辺では同期の集落は根木名川本流を遡った取香川との合流地点の台地上にある関戸遺跡[4]で中期から後期の竪穴住居跡が50軒前後検出されている。また，やや下流に位置する南羽鳥タダメキ第２遺跡（9）[6]で中・後期の竪穴住居跡が29軒検出された。その他子ノ神城跡遺跡（10）[5]では方形周溝墓が，また，南羽鳥タダメキ第２遺跡では土器棺墓が発見されている。

古墳時代後期の集落は成田安食線関連の調査でも，上福田和田谷津遺跡（2），上福田保町遺跡（3），仲兵遺跡（4），松崎播磨遺跡（7）で検出されているように広範囲に展開していることが知られている。また，古墳群は近接しているものだけでも大竹･上福田古墳群（11,12）（前方後円墳２，円墳４，方墳２），松崎･宝田古墳群（13）（前方後円墳１，円墳８），押畑古墳群（14）（円墳４），山口古墳群（15）（円墳５）などがある。このうち上福田13号墳（6）は終末期の方墳で，貝化石を含む砂岩を使用した横穴式石室がほぼ完全なままで検出された。調査後この石室は埋め戻され現状保存されている。

奈良・平安時代の集落は松崎播磨遺跡，烏内遺跡（8）で検出されている。また烏内遺跡では大規模な中世の台地整形や土坑，掘立柱建物跡が検出されている。

参考文献

1）『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1985　㈶千葉県文化財センター

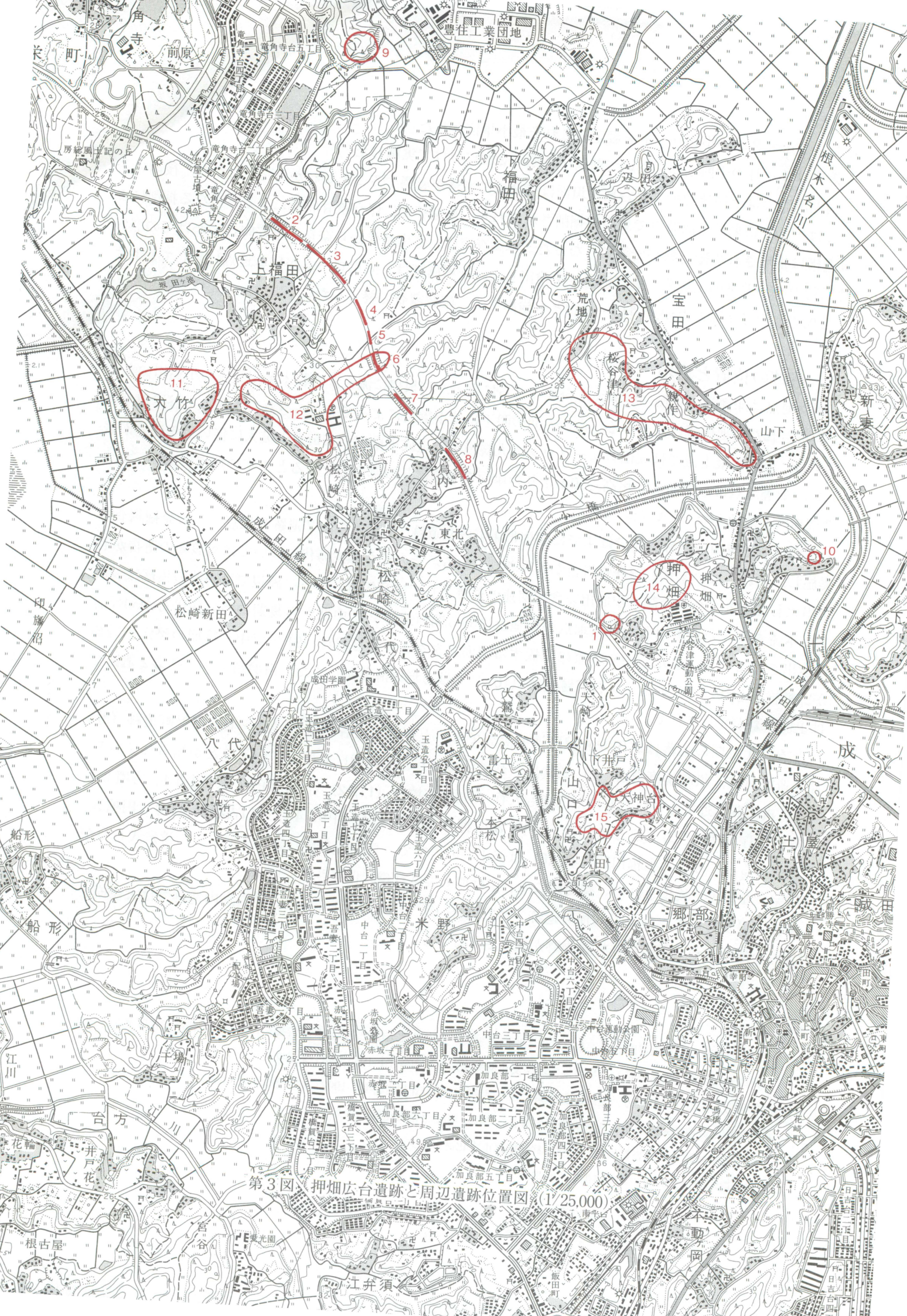
2）『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1985　㈶千葉県文化財センター

3）『主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』1993　㈶千葉県文化財センター

4）『成田新線建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』1982　㈶千葉県文化財センター

5）『押畑子の神城跡発掘調査報告書』1988　㈶印旛郡市文化財センター

6）『南羽鳥遺跡群Ⅳ』2000　㈶印旛郡市文化財センター

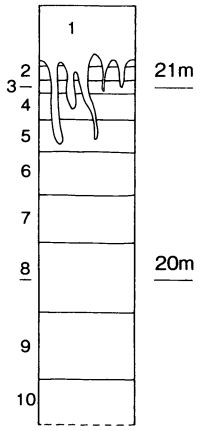


第3図　押畑広台遺跡と周辺遺跡位置図（1/25,000）

Ⅱ　調査成果

1　旧石器時代

確認調査の結果遺物が出土せず，本調査は実施しなかった。調査地区内には計７か所の確認グリッドを設定した。そのうちサンプルとして２Ｃ27グリッド東壁の土層断面を掲載する。（第１図）



1　黄褐色ソフトローム層，Ⅲ層相当。
2　（暗）黄褐色ローム層，Ⅳ層相当。A.T.の拡散が及ばず，全体に暗い色調。赤スコリアが相対的に多い。
3　（明）黄褐色ローム層，Ⅴ層相当。A.T.の拡散で全体が明るい。第1黒色帯に相当する。
4　明黄褐色ローム層，Ⅵ層相当。立川ローム層中最も明るい。５㎜φのA.T.ブロックも見られる。
5　（明）黄褐色ローム層，Ⅶ層相当。A.T.の拡散で明るい。第2黒色帯上部。
6　（暗）黄褐色ローム層，Ⅸａ層相当。第2黒色帯下部，７層に比べて黒味が薄い。
7　暗黄褐色ローム層，Ⅸｃ層相当。第2黒色帯下部，立川ローム層中一番黒味が強い。
8　黄褐色ローム層，Ｘａ層。
9　（青灰）黄褐色ローム層，Ｘｂ層。
10　（青灰）黄褐色ローム層，ＸＩ層。武蔵野ローム最上層。青み強く粘り有り。

第４図　2C27グリッド東壁面柱状図（1/40）

2　弥生時代後期から古墳時代前期

遺構・遺物　該期の竪穴住居跡が２軒検出された。

竪穴住居跡

SI-004（第６図，図版５，12，13，14，15）

弥生時代後期。北側を中・近世の溝状遺構SD-001によって削平されている。床面は全体的に硬く締まってはおらず，覆土と締まり具合にあまり違いがない。硬化面や周溝は確認できなかった。ピットは１つのみで，深さ0.25mと浅いものである。床面の深さは20cmあまりと浅く攪乱を受けやすく，覆土上部は締まりを失っている。覆土下部は細かなローム粒主体で締まりがある。また覆土中には焼土を含まない。遺物の時期から勘案すると炉を構築していたのであろうが，検出した床面上には見あたらなかった。推定で一辺が5.0mほどの隅丸方形になると思われる。

１は折り返し口縁の壺口縁部片で，外面に羽状縄文，その下には３列の結節文，２条一組の棒状浮文があるが，一周何単位か不明。折り返しの先端には押圧波状の刻みが巡る。２は折り返し口縁の甕で，スコリアを多く含み軟質で器面が溶けている。３は装飾壺の口縁端で，折り返し口縁の下端に深い刻みを施す。４は口縁端部に縄文，口縁にはハケによる波状文を施す。５は折り返し口縁で，内外面，口縁端部に撚糸文が見られる。６は折り返し口縁の鉢で連続した指頭痕を残す。７は内面を赤彩する鉢片で，附加条縄文が羽状に施される。８は小型甕の下半部で，外面は丁寧なナデ調整，底部は簀子状圧痕とヘラケズリ痕の両方が見られる。９は小型甕で口径14.3cm，器高は11.0cmになる。内外面とも丁寧なナデで，内面下半は丁寧なヘラミガキ調整を施す。10は外面に絡状帯撚糸文を施す甕頸部である。11は甕肩部で附加条縄文が羽状に，12は小型壺で波状の結節回転文が見られる。須恵器のような灰色に発色する。13は壺の肩部で波

状の結節回転文，14は附加条縄文の地文の上に2列の結節文が追加される甕である。15，16，20も同様の施文をする甕肩部片である。17，18は波状の結節回転文が見られる。19は附加条縄文の甕胴部である。外面に煤状付着物が認められる。21から28は壺および甕の底部片で21，24，25，27にはハケ目が，また22には撚糸文が，22，23，24，26には底面に木葉痕が見られる。29は器台か高坏の脚部片で，屈曲部に孔をあけているが，全体でいくつあけられていたかは破片で不明。30は勾玉型土製品で長さは4.2cmになる。孔はあけられていない。31は土製紡錘車で約半分が残存する。表面には刺突文が施されている。裏面は剥離が著しく実測していないが，刺突文の痕跡が辛うじて残っているので，全面に刺突文が施されていたことがわかる。32は砂岩製の扁平砥石で正面は大きく窪んでいる。全面とも研磨が著しい。正面および裏面には無数の筋状の擦痕が入る。正面下部に１か所孔があけられている。

SI-006（第７図，図版５，14）

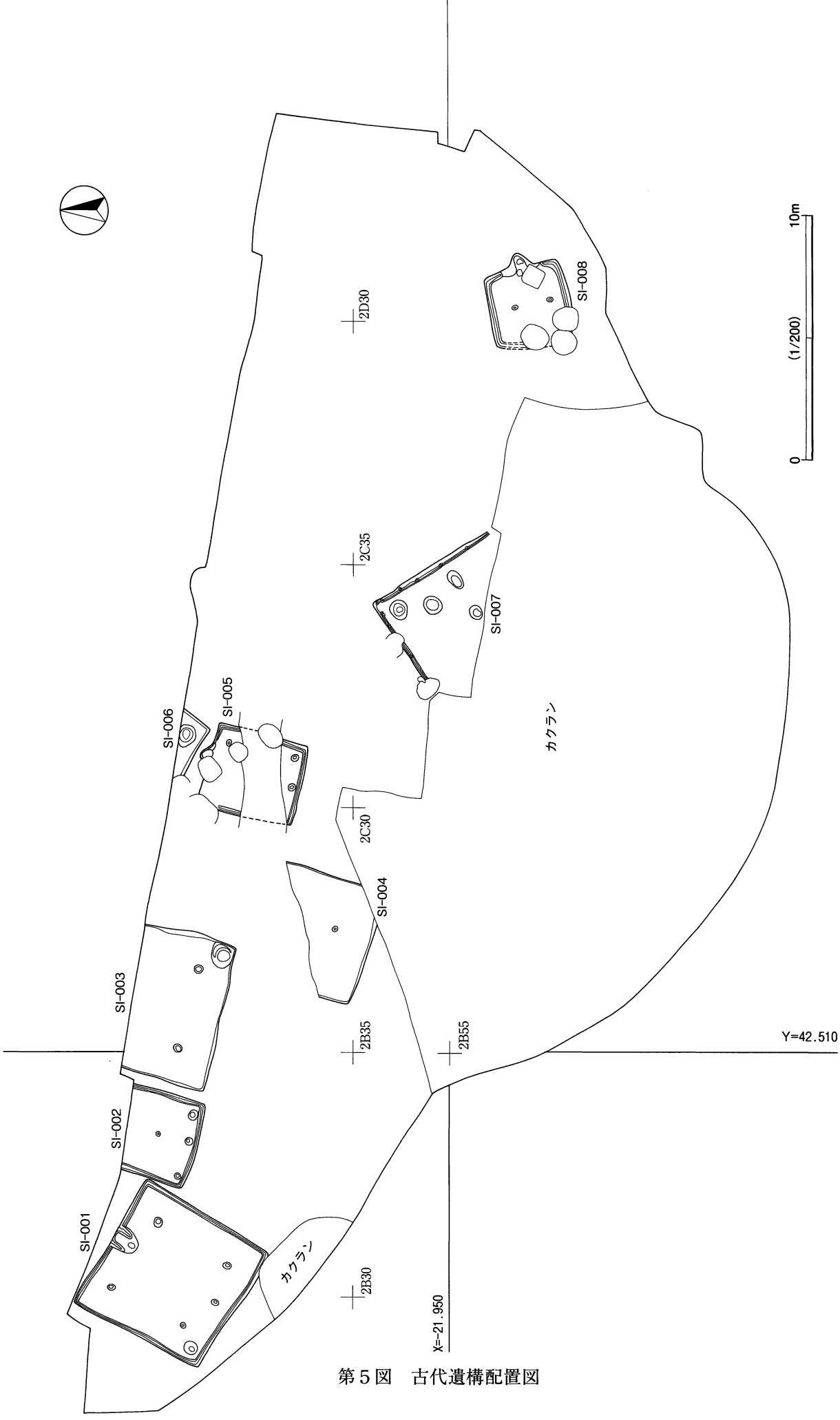
弥生時代後期から古墳時代前期。調査区中央より北側に位置し，大半が事業地外にあたるため，南東端のコーナー付近のみ調査した。西端を土坑列のうちSK-003によって攪乱されている。覆土は細かなローム粒を均質に含む。住居形態は隅丸方形で，調査範囲内では周溝を確認できなかった。床面の深さは0.35ｍほどである。南東隅には貯蔵穴と思われるピットがある。直径0.7ｍ～0.9ｍ，深さ0.7ｍ余りで，二段に掘り込んでいる。底面には平坦面がある。

遺物は非常に少ない。１は押圧波状文の甕口縁破片，２は外面はハケ目で，内面には上下方向への波状のヘラナデ痕が見られる。甕の底部片であろうか。

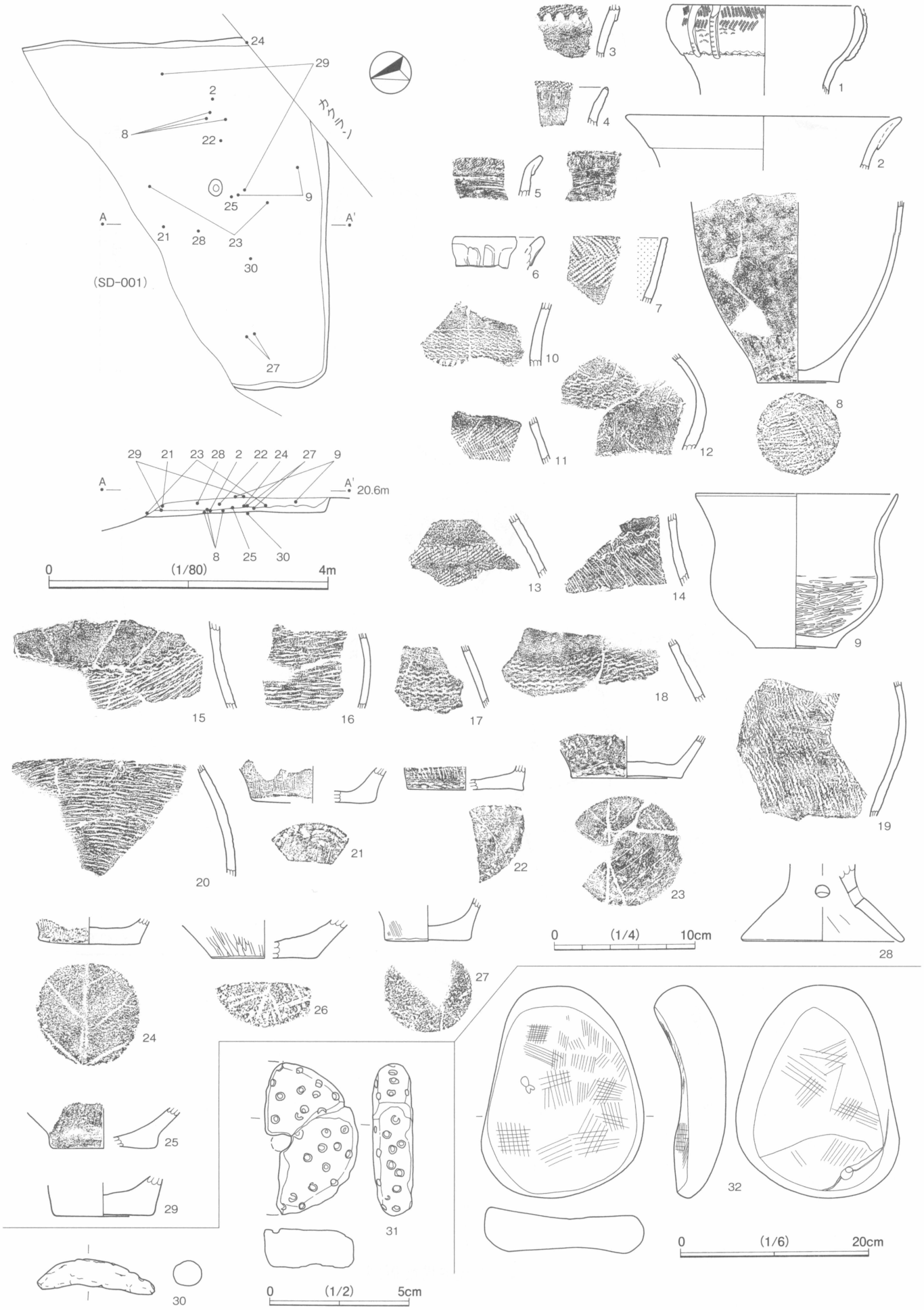
遺物

その他出土遺物（第８，22図，図版14）

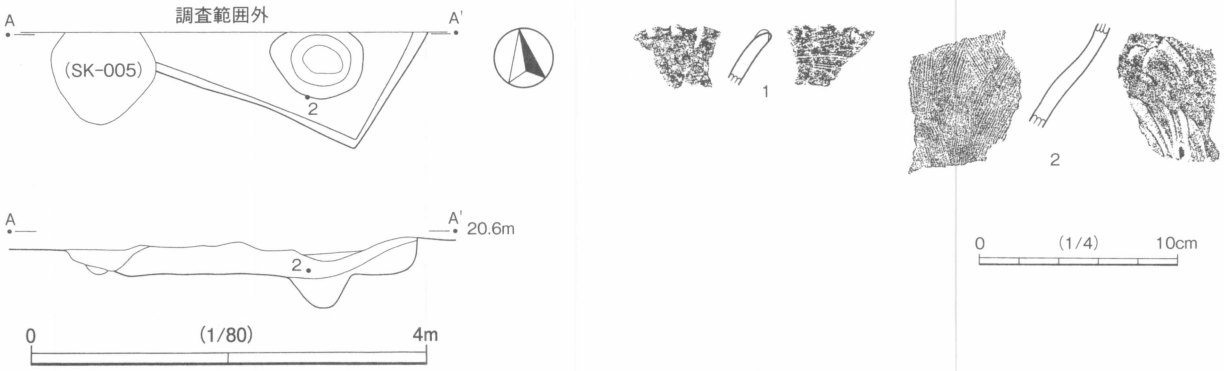
１は押圧波状の甕口縁破片，２は甕口縁部付近の破片でハケ目調整を細かく施し，連続するキザミを入れる。３は結節文の甕胴部片で，４，５はハケ目調整の甕，６は鉢で破片上端に細い孔が残っている。７は羽状縄文に連続刺突文が見られる。８は13と同一個体になる土師器甕で外面には細かくヘラケズリ調整を，内面にはヘラナデ，口縁近くはヘラミガキ調整する。９から15は甕の底部片で，14は大型のもので外面はミガキ，内面はナデ調整する。16，17は土師器高坏と考えたが，16は別器種かもしれない。第22図１はSD-001出土の安山岩製敲石で上部に敲打痕残る。下半は欠損するが，破損面に細かく打ち欠いた痕跡が見られる。弥生時代のものであろうか。


SI-001
SI-002
SI-003
SI-004
SI-005
SI-006
SI-007
SI-008
2B30
2B35
2B55
2C30
2C35
2D30
カクラン
カクラン
X=-21.950
Y=42.510
0
(1/200)
10m

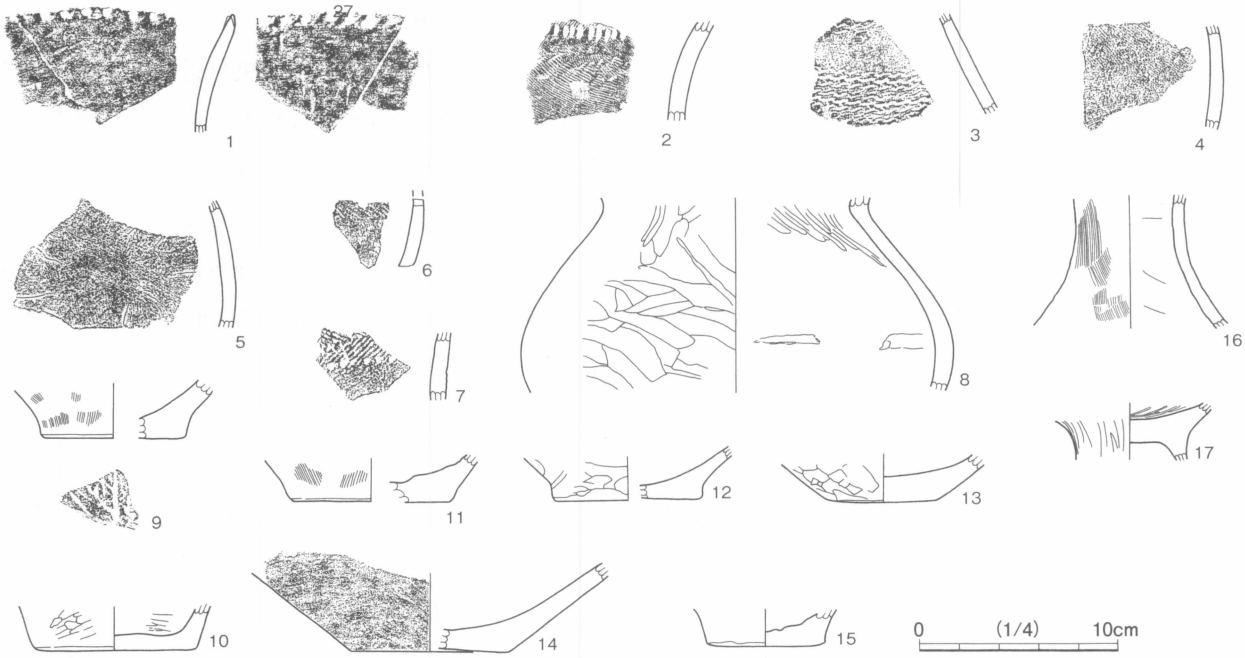
第５図　古代遺構配置図



第6図　SI-004



第７図　SI-006



第８図　その他出土遺物

3　古墳時代後期

遺構・遺物　古墳時代後期の竪穴住居跡が３軒検出された。

竪穴住居跡

SI-001（第９，10，11，12図，図版３，10，11，12，14）

調査区最西端に位置する。南端で大きな攪乱に接し，壁の一部が壊されている。カマドを有する竪穴住居跡で，カマドは北側壁にある。カマドとカマドに相対する位置に掘られた出入口ピットを通る軸を主軸とすると，それはＮ－33°－Ｅとなる。それぞれの壁長は北から時計回りに6.0m，0.59m，0.56m，0.57mとなる。床面の深さは30cmから50cmほどになる。各コーナーはほとんど直角に折れていて，全体に正方形のイメージが強い竪穴住居跡となっている。４本の主柱穴がそれぞれのコーナー付近に造られていて，それより内側の床面が硬化している。なお，貯蔵穴と思われるピットが西コーナーに造られている。大きさは直径0.6m，深さ0.75mになるが，遺物はほとんど見られない。カマドは北側壁中央付近に造られているが，現状では煙道部の壁外への掘り込みはほとんど見られない。残存する両袖は壁から直線的に延びている。住居セクションからわかるが，住居が埋没し始める前には，一気に崩れていた様子が見られる。燃焼面は壁から80cm住居内に入ったところに残っている。ボロボロの土製支脚が直立したまま燃焼面より煙道部に近い位置のカマド内に残っていた。住居覆土では焼土・炭化材を検出したが，分布はまばらで若干床面から浮いたものが主体である。カマド東側の壁際には幅50cm，長さ1.3mの範囲に床面に貼り付くように２cm～３cmの厚さで粘土が分布していた。実測可能な残存状況が良好な遺物が非常に多い。住居床面から覆土上層にかけて広く分布している。

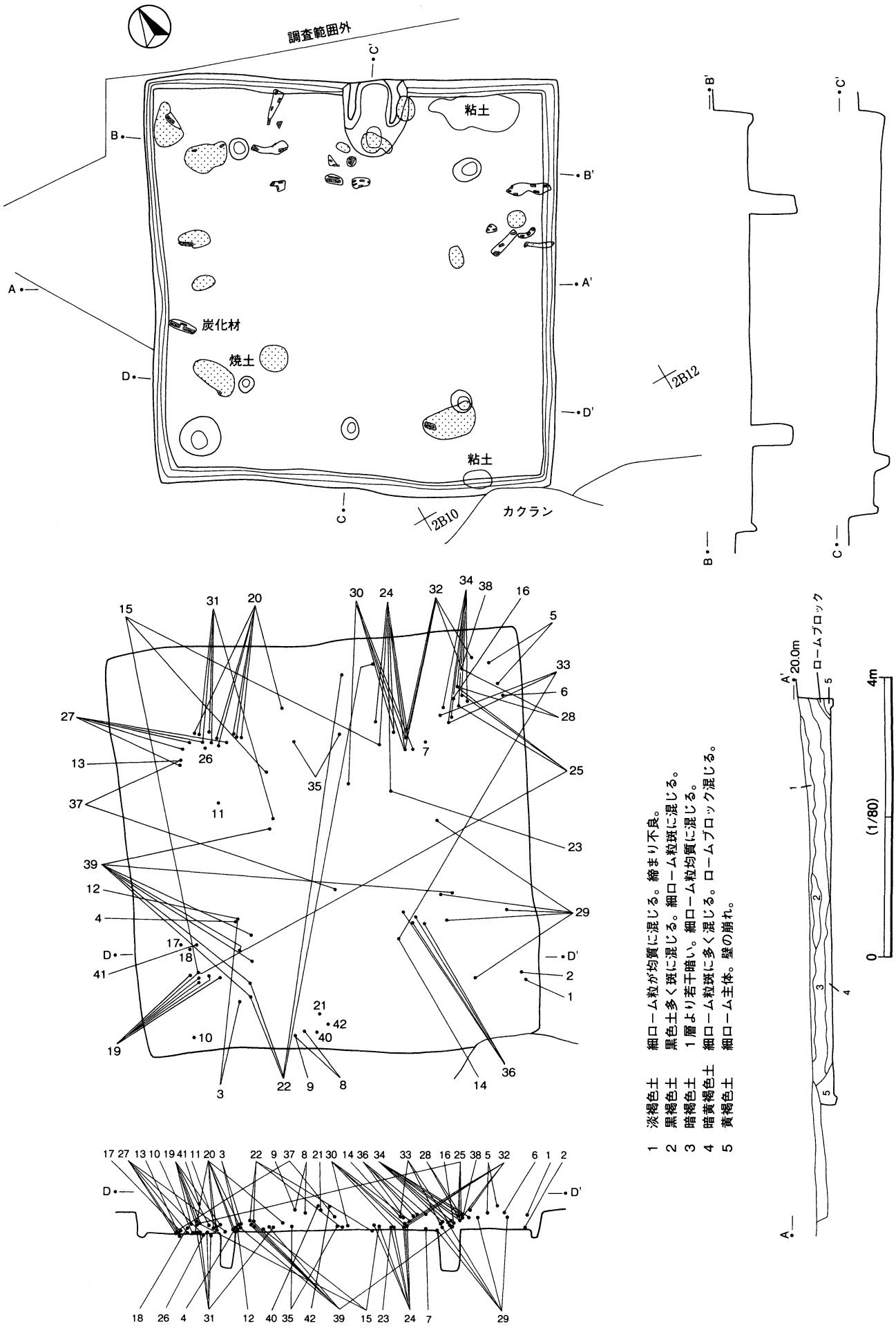
遺物は土師器ばかりで須恵器は全く出土していない。１は土師器杯で，体部中央から大きく外反するタイプである。内面はボロボロで調整は不明。外面はヘラケズリ後軽くナデている。口縁端が玉縁状に膨らむイメージである。２は丸底で口径部が大きく，また外反するタイプの杯である。完形。器壁は厚く重い。口縁部端はわずかに残るが，ほとんどが細かく打ち欠いたように欠損している。口縁端を中心に内外面に幅広の赤彩を施す。ただし，内面の口縁に近い部分は円帯状に摩滅し，赤彩が剥離している。３，４，５も２と同タイプの完形か完形に近い土師器杯である。２から５はいずれも長期に使用されていたようで，器面の剥離が著しい。６は須恵器模倣の土師器杯で，内面は丁寧なヘラケズリ調整を施すが，底部付近で被熱のためボロボロになっている。７は口縁部が２ほど大きくないが，外反するタイプの土師器杯である。内面には赤彩を確認できるが，外面は明瞭な赤彩痕は認められない。８は須恵器模倣の土師器杯である。内面はヘラミガキ調整を施すが，内外面とも器面の剥落が著しい。９は土師器杯で胎土が軟質のため，器面が溶けてしまっている。内面はボロボロである。外面は極一部にヘラ削り調整痕を残している。10は土師器杯で特に底部がぶ厚く重い。外面は粗いヘラ削りで，内面はヨコナデ後粗いミガキを施す。11は口縁部が内側に折れ曲がるタイプの土師器杯で，底部を欠損する。内外面に赤彩を施すが，外面側ではその境が不鮮明ではっきりしない。12は丸底の土師器杯で，ほぼ完形である。内面はナデ，外面はヘラケズリ後ナデ調整する。口縁部直径は13.2cmである。13は土師器杯で完形品であるが，口縁端部は8割ほど細かく打ち欠いたように欠けている。口縁端を中心に外面と内面に赤彩を施す。さらに内面には底部中央を通るように１本直線的にハケ状工具で彩色している。14は緩やかに内湾する土師器杯片で，内面はヘラミガキ後黒色処理の痕跡が若干認められる。15は土師器椀の破片で胎土はかなり粗く，また調整もやや粗く内面には接合痕を残している。外面はヘラケズリ調整であるが，表面が溶けて調整が不鮮明である。16は口縁

部に赤彩する土師器高坏で，器厚は全体に厚い。外面は基本的にヘラケズリ調整で，杯部にヘラミガキをする。内面はヘラミガキである。杯部径は12.1cm，器高は10.1cmである。17は完形の手ずくねの土器である。指圧痕がはっきり残る。口径3.9cm，器高2.1cm。18は土師器の手ずくね土器で，器高は3.3cmである。完形であるが，内外面に粘土紐巻き上げ痕を残している。19は土師器椀で，内面はヘラナデ調整であるが，底面付近は剥離している。また，外面も剥離が著しい。底部は直径5.1cmで，調整はザラザラして不明。口径16.1cm，器高11.6cmである。20は土師器甕の口縁から体部にかけて残存する。口縁部が大きく外反し，最大径が口径となる器形である。内面は丁寧にナデ調整，外面はヘラケズリ調整を施す。粗い粒子の砂粒を多量に含み，そのため外面はかなりザラザラしている。21，22，23は土師器甕の口縁部片である。底部を欠損する。全体に器壁は厚い。22の内面はナデ調整だが，接合痕が残っている。軟質で砂っぽい胎土である。24は土師器甕で，外面はヘラケズリ後粗いミガキ調整を施す。内外面とも下半部が被熱により器面が剥落しボロボロである。25，26，27は小型の土師器甕の破片である。27は外面はヘラケズリ，内面はナデ調整であるが粘土接合痕が残る。底部はヘラケズリ調整である。28から33は土師器甕である。外面はヘラケズリ調整，内面はヘラナデ調整を基本とする。33は丸底の土師器甕と考えられる。胴部は球体で，細い頸部が付く。ヘラケズリの単位は不明瞭で，ヘラケズリによってできるケズリの稜線を消すように丁寧に球体を作り出している。内面は剥離著しい。外面底部には被熱痕が残る。口径は14.2cm，胴部最大径は29.0cmである。34はほぼ完形の土師器甑である。口径24.3cm，底径7.0cm，器高19.6cmである。外面は粗いヘラケズリ，内面は丁寧なナデ調整で，一部にちぢれが見られる。35は小型の土師器甕で内面は丁寧なナデ調整，外面はヘラケズリだが使用に伴う摩滅が認められる。36は土師器甕で，全体が長胴形である。内面はヘラナデであるが，器面の剥離が著しい。砂粒を余り含まない精選された胎土で，緻密である。焼成は良好で硬質。37は土師器甕の上部片である。38は土師器甕の底部片である。39は土師器甑で全体の90％が残存する。内面は丁寧なナデ調整，外面はヘラケズリ調整で，その稜線が明瞭に残っている。40は安山岩製の窪石で，中央部は窪みそれ以外は研磨が著しい。円形扁平で側面に打撃痕が著しいが，側面には打撃に伴う割れも見られる。41は撥型の頁岩製砥石で六面とも使用による研磨が進んでいる。42は流紋岩製の台石で，正面，裏面とも研磨著しい。

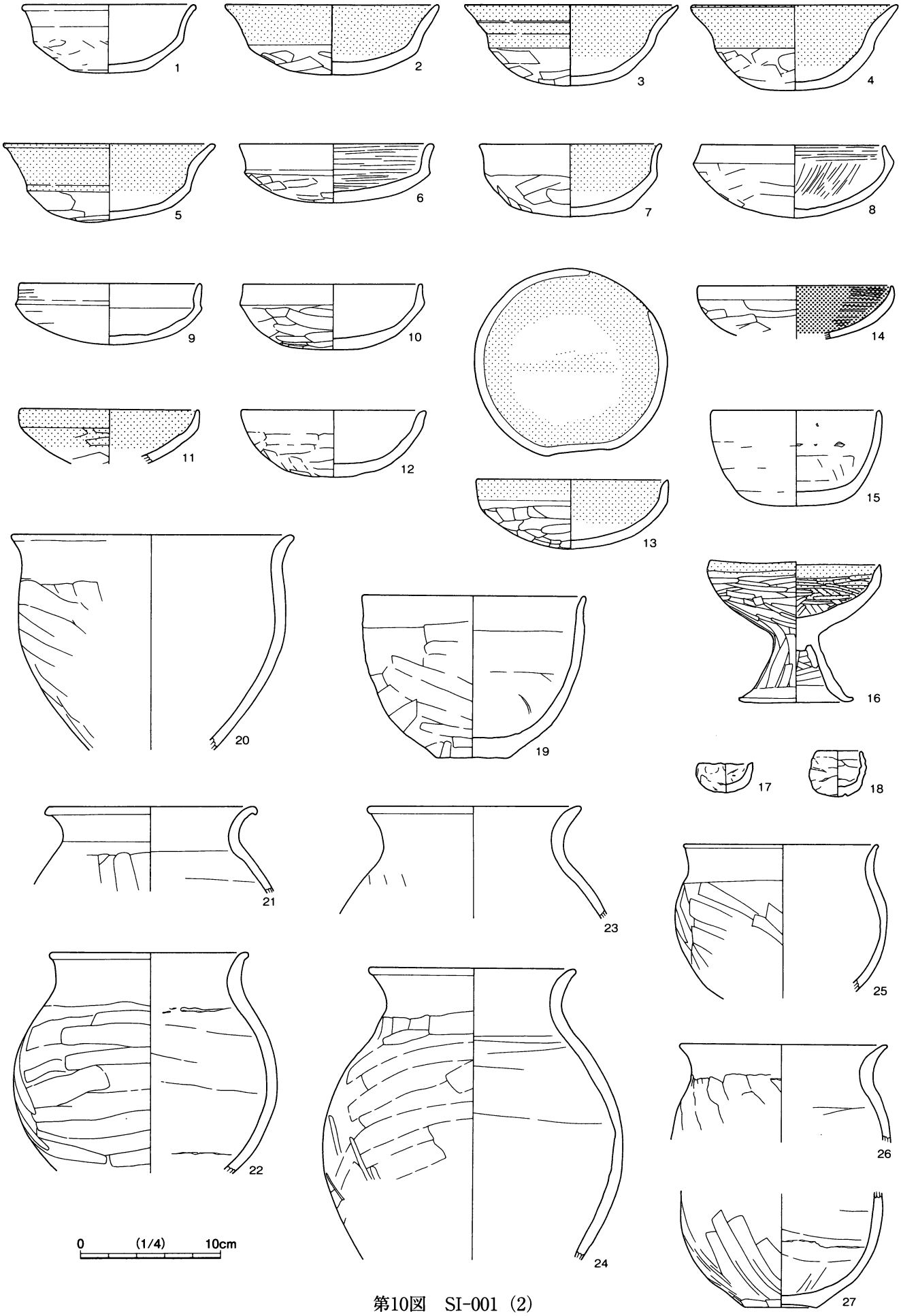
SI-003（第13，14図，図版４，12，14）

SI-002の東側に位置する。北半分は事業地外であるため調査は実施していない。ほぼ住居の南半分を掘ったものであるが，床面の深さは70cm余りと比較的深い。東側壁上端はやや掘りすぎているかもしれない。南東側コーナーには貯蔵穴と思われるピットP_3（直径0.9m，深さ0.45mの丸底）がある。また，主柱穴の一部P_1（深さ0.6m），P_2（深さ0.6m）がある。硬化面は住居中央を南北にアメーバ状に不定形に広がる。住居には壁溝は確認できない。貯蔵穴壁駆け上がり付近から完形小型甕（**14**）が出土している。その他完形に近い遺物は床面近くで出土している。また残存状況の良い遺物は住居の東側に偏って出土している傾向が見受けられる。覆土を５層に分層しているが，全体的に見ると自然堆積である。カマドは検出していないが，遺物が所属する時期を勘案すると，北側の壁にあったものと考えられる。

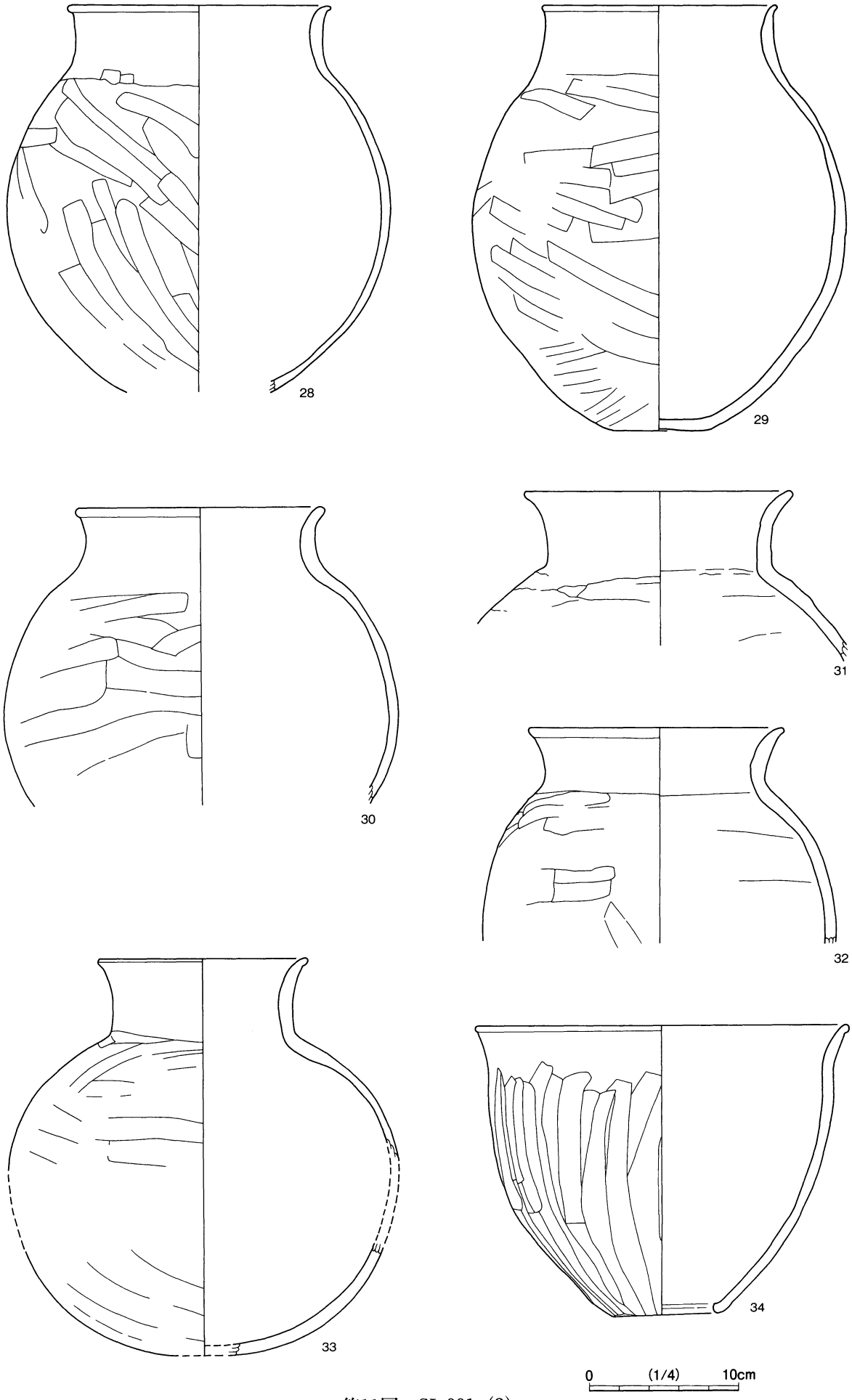
１は須恵器模倣の土師器杯で，軟質で器面が溶けている。内面は全面ヘラミガキで口縁部はボロボロになっている。２は内外面とも全面赤彩をした土師器杯である。全体の80％が残存する。内面は被熱しボロボロで一部に辛うじて赤彩を残している。口径13.7cmになる。３は土師器杯の口縁部片で，外面には粘土


調査範囲外
粘土
炭化材
焼土
カクラン
2B10
2B12
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
1 淡褐色土 細ローム粒が均質に混じる。締まり不良。
2 黒褐色土 黒色土多く斑に混じる。細ローム粒斑に混じる。
3 暗褐色土 1層より若干暗い。細ローム粒均質に混じる。
4 暗黄褐色土 細ローム粒斑に多く混じる。ロームブロック混じる。
5 黄褐色土 細ローム主体。壁の崩れ。
ロームブロック
20.0m
0
(1/80)
4m

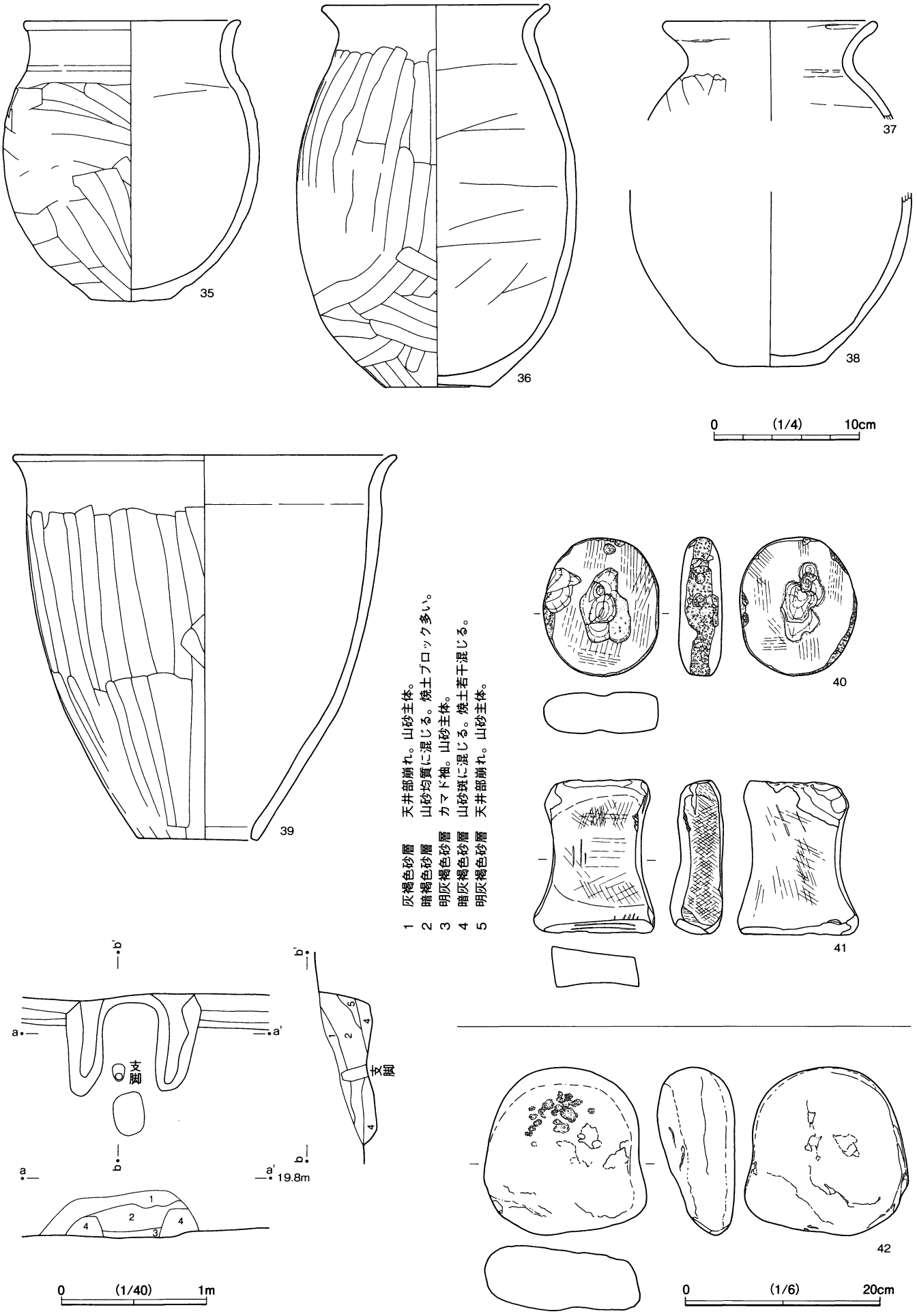
第9図 SI-001 (1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0 (1/4) 10cm

第10図　SI-001 (2)



第11図　SI-001（3）


35
36
37
38
0 (1/4) 10cm
39
1 灰褐色砂層 天井部崩れ。山砂主体。
2 暗褐色砂層 山砂均質に混じる。焼土ブロック多い。
3 明灰褐色砂層 カマド袖。山砂主体。
4 暗灰褐色砂層 山砂斑に混じる。焼土若干混じる。
5 明灰褐色砂層 天井部崩れ。山砂主体。
40
41
42
a
a'
b
b'
支脚
19.8m
0 (1/40) 1m
0 (1/6) 20cm

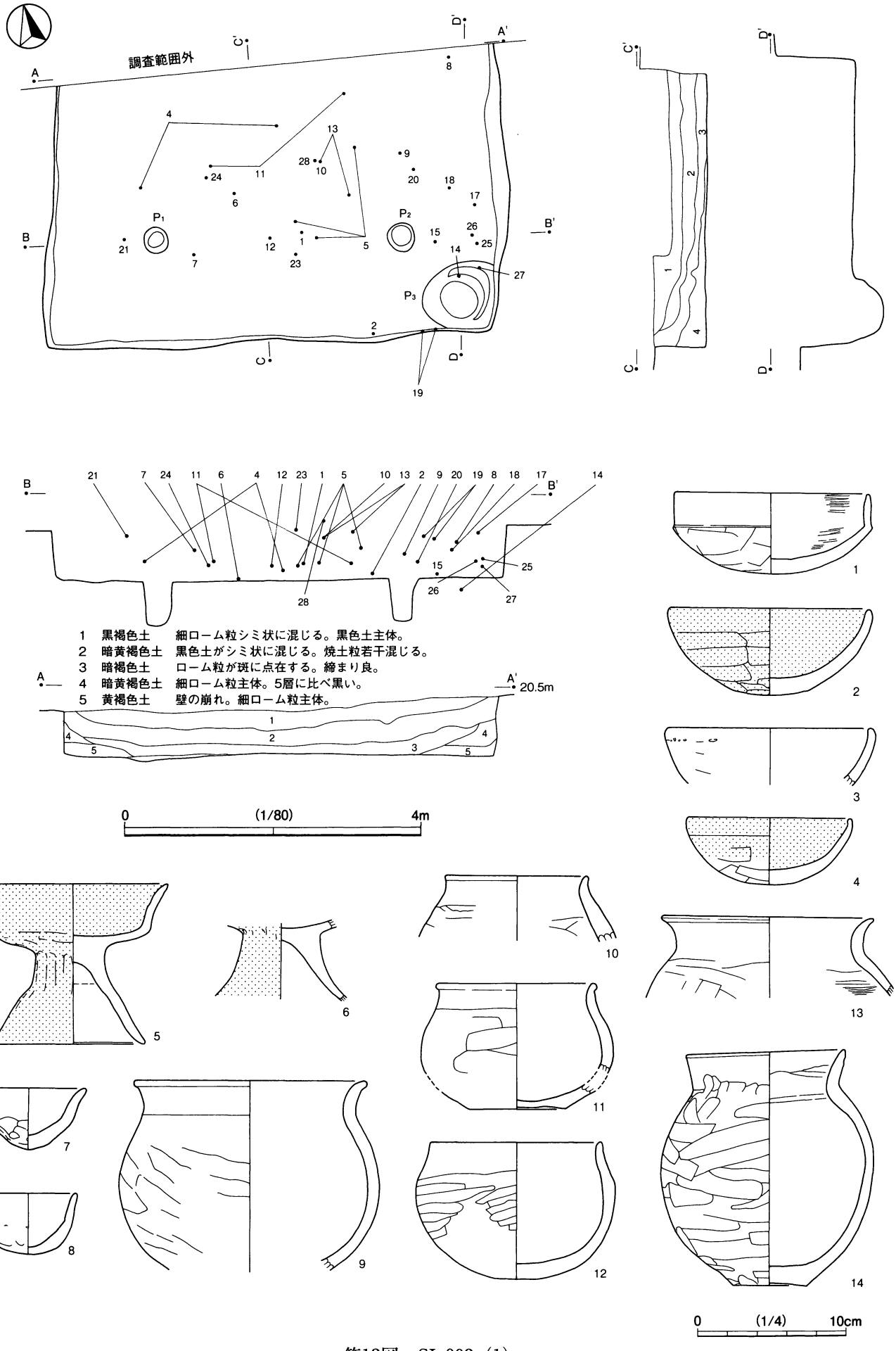
第12図 SI-001 (4)

接合痕がある。４は半球形の土師器杯で，器面が摩滅してはっきりわからない部分があるが，内面はほぼ全面赤彩，外面は口縁に近いところは赤彩が残る。口径推定11.0cmである。５は土師器高坏で，胎土が軟質で器面が全体に著しく摩滅しているものの，部分的に赤彩痕が認められる。推定すると脚部裏をのぞき全面赤彩していたと考えられる。杯部口径12.9cm，脚部最大径10.1cm，器高10.8cmである。６は外面を赤彩する土師器高坏の破片である。７はミニチュアの土師器杯で完形品である。口縁部はヨコナデされている。体部外面には指圧痕が見られる。口径7.7cm，器高は4.2cmである。８はミニチュアの土師器杯で，口縁端はヨコナデ調整する以外指圧痕を残す。口径6.6cm，器高4.2cmである。スコリアを含む。９は土師器甕片で，口縁部が被熱し，器面がボロボロである。10から11は小型の土師器壺である。12は完形の土師器椀で，体部中に多量のスコリアを含む。軟質で粗い胎土である。口径は11.7cm，器高は9.4cmの丸底になる。体部外面は横方向のヘラケズリとヘラミガキだが，軟質で少し器面が溶けている。口縁端部は摩滅している。13は土師器甕の口径部片である。14はほぼ完形の小型甕で，高さが16.1cmになる。整形はやや粗雑で，口縁部内側をヘラケズリ調整している。肩部には被熱痕がある。厚手で重たい。底面はヘラケズリ調整している。15はほぼ完存する土師器甕である。口径16.8cm，器高28.2cmで，外面はヘラケズリ調整で，内面はナデている。16は土師器椀の底部片で，内面には赤彩が残る。17から20は土師器甕の底部片である。そのうち20は底部のみ完存し，平坦な底部であるが，全体的には丸底に近いイメージである。外面はヘラケズリ調整，内面はヘラナデで，凹凸面を完全には平滑にできず，凹部が埋められずに残っている。21は常総型甕と考えられる土師器甕底部片である。外面は斜め方向の細長いヘラミガキで，長石や大粒の砂粒を多量に含む。22, 23は土師器甑口縁部片である。24は土師器甕の口縁部片である。25は安山岩製の磨石で，端部が打ち欠かれている。26は安山岩製の石皿を転用したと思われる砥石で，全面に研磨が入る。27は凝灰岩製の砥石で，擦痕が全面に見られる。28は土製品で円筒状に丸めた粘土塊を両側から押し潰したような成形である。半分欠損している。

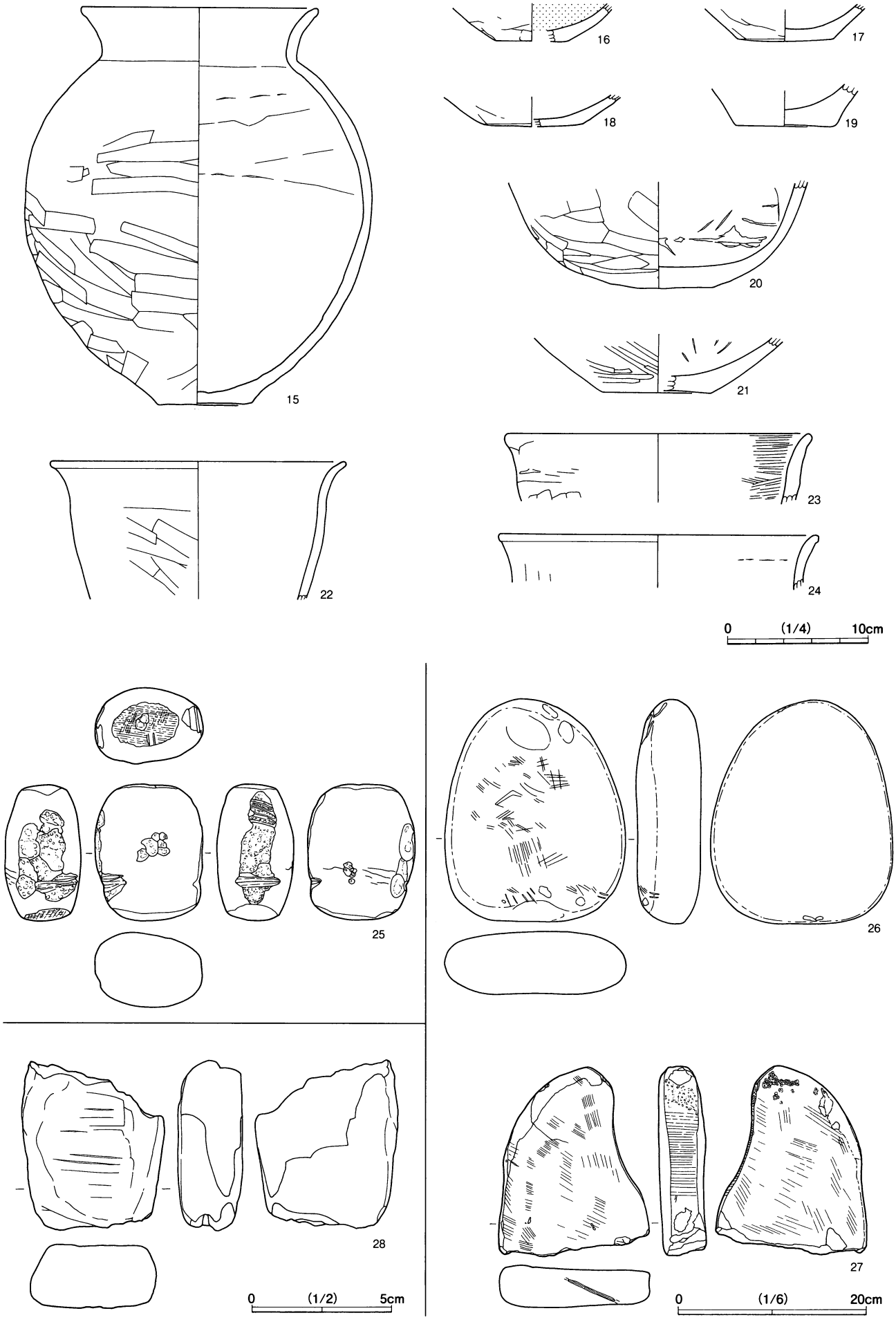
SI-007（第15図，図版６，13，15，17）

調査区中央やや南寄りに位置する。南側半分が大きく攪乱されている。また，中・近世のピット群や土坑墓によって蜂の巣状に細かな攪乱を受けている。したがって残存状況は非常に悪いが平面形態はコーナーが直角の全体的には正方形になると思われる。P_1（上端直径0.8m，深さ0.35m）としたのがわずかに残る柱穴の可能性がある。コーナー寄りのP_2（上端直径0.7m～0.8m，深さ0.4m）は貯蔵穴であろう。住居床面までの深さは最深部で0.6mとなるが，残存状況の良好な遺物は極めて少ない。床面よりやや浮いたレベルで土製丸玉が１点出土している。壁コーナーは丸みを帯びずに，ほぼ直角になる。壁溝はコーナー以外に見られるが，その壁溝には小さなピットが一定間隔で掘られている。床面には炉跡と考えられる被熱した浅い掘り込みがある。P_3，P_4で，前者は幅0.5m，深さ0.2m，後者は幅0.5m～0.8m，深さ0.1mになる。床面直上の覆土には焼土や炭化物が多く含まれていた。カマドは構築されるとすれば北側壁になると思われるが，痕跡はなく，またカマドを構成する山砂や粘土・焼土塊は見られず，したがってカマドはなかった可能性がある。

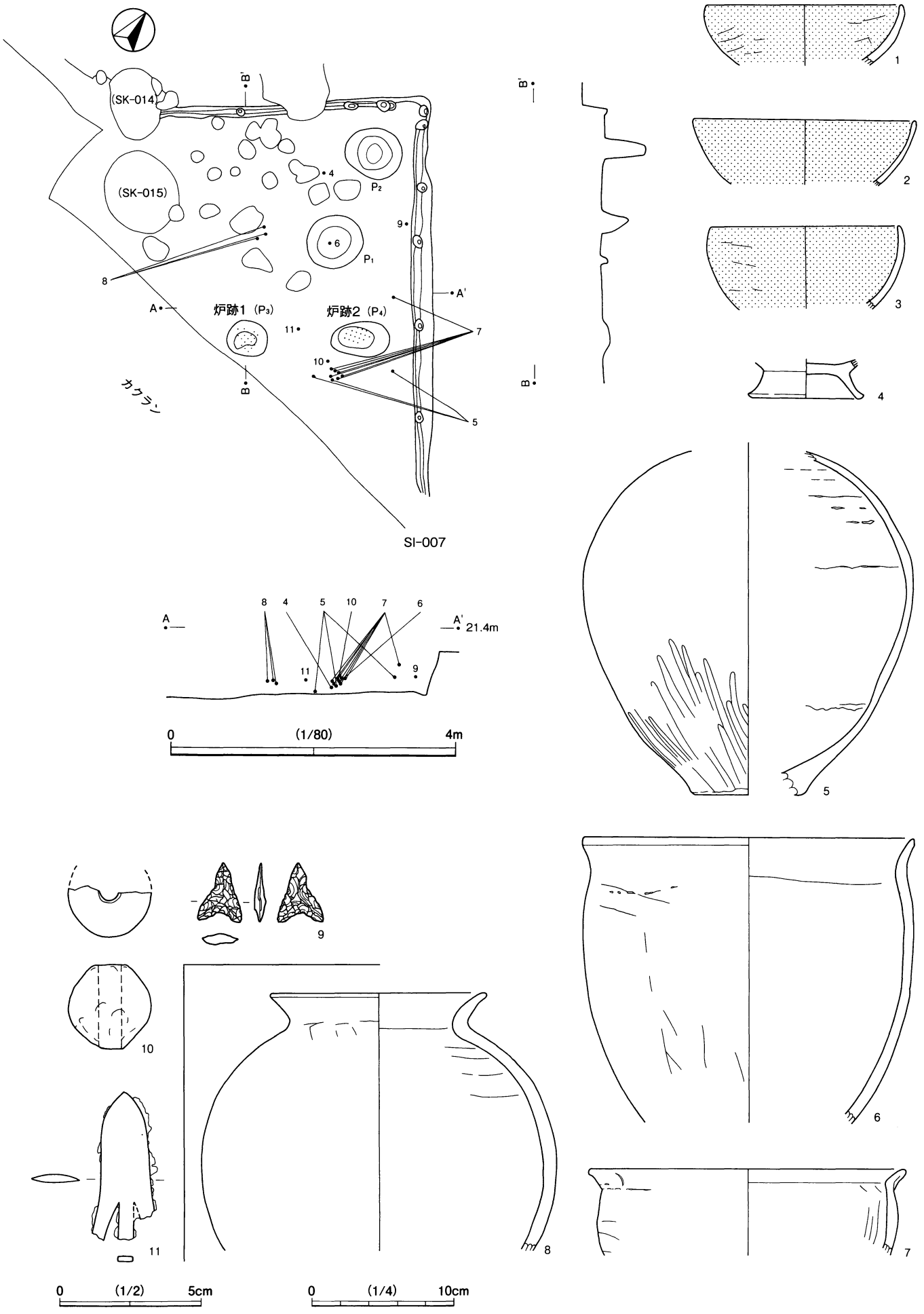
１から３は土師器杯の口縁部片でいずれも内外面を赤彩する。４は土師器高台付き杯の底部片で，内面と破片端部が摩滅しており，２次使用された可能性がある。５はなで肩の土師器壺の胴部で，口頸部はかなり細くなるようである。内面はヘラナデ調整でその肩側には粘土接合痕が多く見られる。外面下半部に


調査範囲外
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
P1
P2
P3
1 黒褐色土 細ローム粒シミ状に混じる。黒色土主体。
2 暗黄褐色土 黒色土がシミ状に混じる。焼土粒若干混じる。
3 暗褐色土 ローム粒が斑に点在する。締まり良。
4 暗黄褐色土 細ローム粒主体。5層に比べ黒い。
5 黄褐色土 壁の崩れ。細ローム粒主体。
20.5m
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第13図 SI-003 (1)



第14図　SI-003（2）


(SK-014)
(SK-015)
B'
B
A
A'
P2
P1
炉跡1 (P3)
炉跡2 (P4)
カクラン
SI-007
21.4m
0 (1/80) 4m
0 (1/2) 5cm
0 (1/4) 10cm

第15図　SI-007

縦方向のヘラミガキを施す。胎土中には大粒砂はまったく見られず，表面はサラサラした感触である。底部は平底で分厚くなる。６は口縁部が最大径となる土師器甕または甑の胴部である。外面はヘラケズリ，内面はヘラナデ，外面は被熱し縮れている。７は折り返し口縁の土師器甕であるが成形が粗雑である。８は土師器甕で，被熱し器面が縮れていて調整痕不明。９はチャートの鏃，10は半分欠損した土製丸玉で直径2.93cm，残存重量は11.5ｇになる。11は鉄鏃で逆刺部がある。

４　奈良・平安時代

遺構・遺物　奈良・平安時代の竪穴住居跡が3軒検出された。墨書土器が比較的多く見られる。

竪穴住居跡

SI-002（第16図，図版４，12，15）

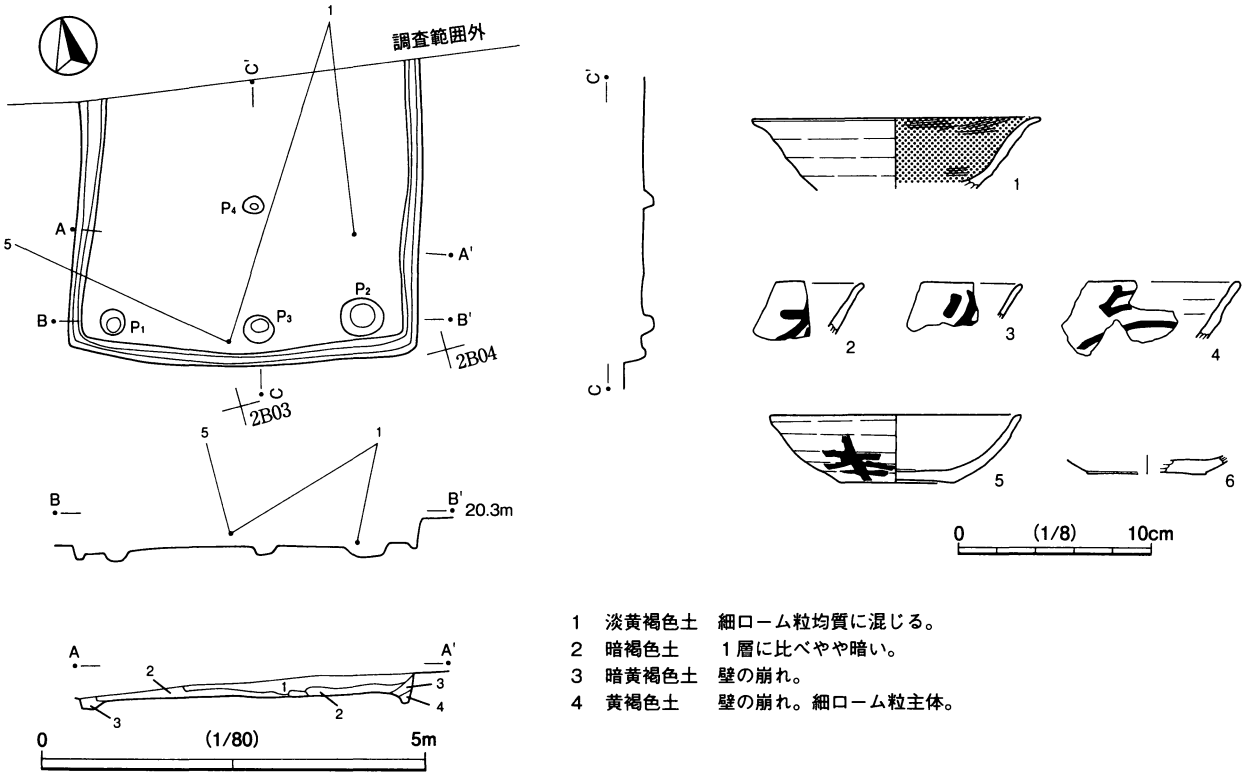
SI-001の東側に位置する。北側は事業地外となるため一部調査できなかった部分がある。北側は確認調査時に深く掘りすぎたため床面までが浅くなっている。床面の硬化は出入口ピットと考えられるP_3から住居中央部のP_4を通る幅の狭い範囲に限られている。遺物は少ない。住居覆土北端中から山砂層が確認できることからカマドは北側壁に造られていたものと思われる。一見すると柱穴に見えるP_1やP_2は掘り込みが10cmほどで極めて浅く，柱穴とは考えにくい。

実測個体数は極めて少ない。特徴は墨書土器の多さにある。１は大きく口縁端が外反する土師器杯で，内面はヘラミガキ・黒色処理を施す。２，３，４はいずれも土師器杯の体部片で，それぞれ外面に墨書の一部が確認できるが文字は判読できない。５は底部回転糸切りの土師器杯で全体の80％が残存する。体部は底部から緩やかに内湾するが，口縁端でやや外反する。口径13.0cm，底径5.9cm，器高3.6cmである。その体部外面には「本」の墨書がはっきりと確認できる。６は土師器杯の底部片である。いずれも覆土中層からの出土である。

SI-005（第17図，図版５，13，15）

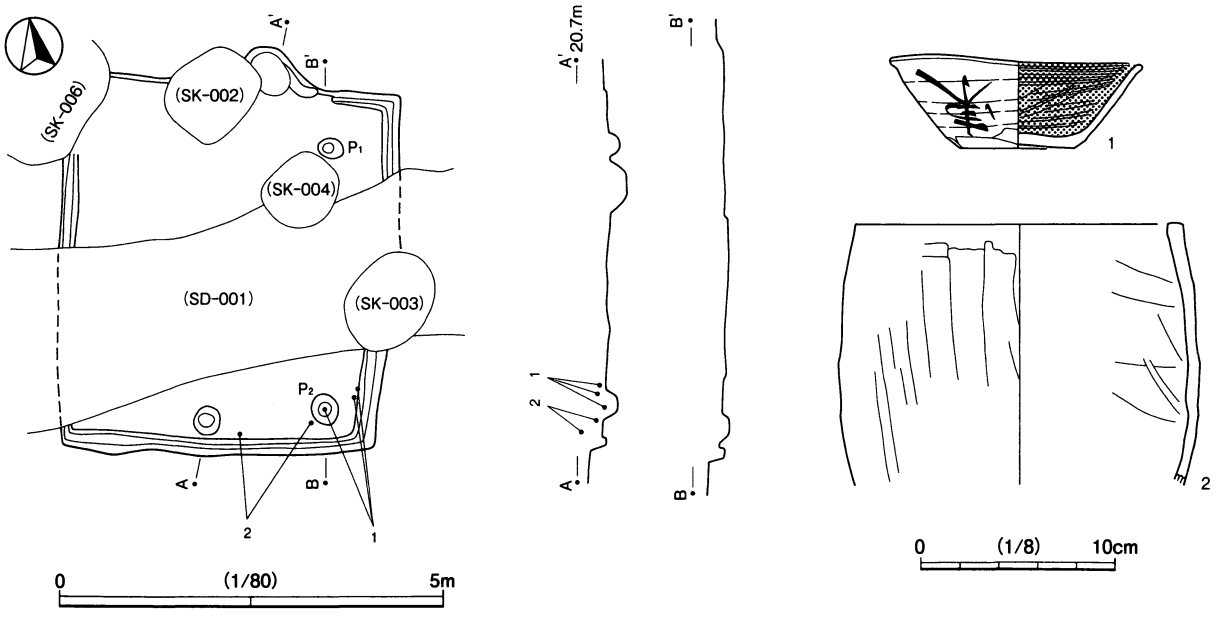
土坑列によってカマドや壁，床面に大きな攪乱を受けている。SD-001と重複するがその深さはお互いほとんど同じになる。残存する床面の掘り込みは極めて浅く，出土遺物も少ない。カマドは北側壁中央付近に造られているが左側袖を土坑列によって抉られていて，カマドはその基底部が辛うじて残っているのみである。したがってカマド単独の実測図は作成していない。柱穴と思われる掘り込みの深いピットはない。カマドと対する壁前に出入口ピットが掘られ，住居のカマドと出入口ピットを通る主軸（N－20°－E）より東側の床面には掘り込みの浅い小ピットが計２か所（P_1，P_2）で確認できるが，西側の床面にはピットはない。それぞれ深さはP_1が10cm，P_2が15cmほどと浅い。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は極めて少ない。１は土師器杯で，内面はヘラミガキで黒色処理を施す。外面には鮮やかに「東」の墨書が見られる。２は筒型の壺片で，外面はヘラケズリ調整，内面はヘラナデである。いずれも覆土中層からの出土である。



1　淡黄褐色土　細ローム粒均質に混じる。
2　暗褐色土　　1層に比べやや暗い。
3　暗黄褐色土　壁の崩れ。
4　黄褐色土　　壁の崩れ。細ローム粒主体。

第16図　SI-002

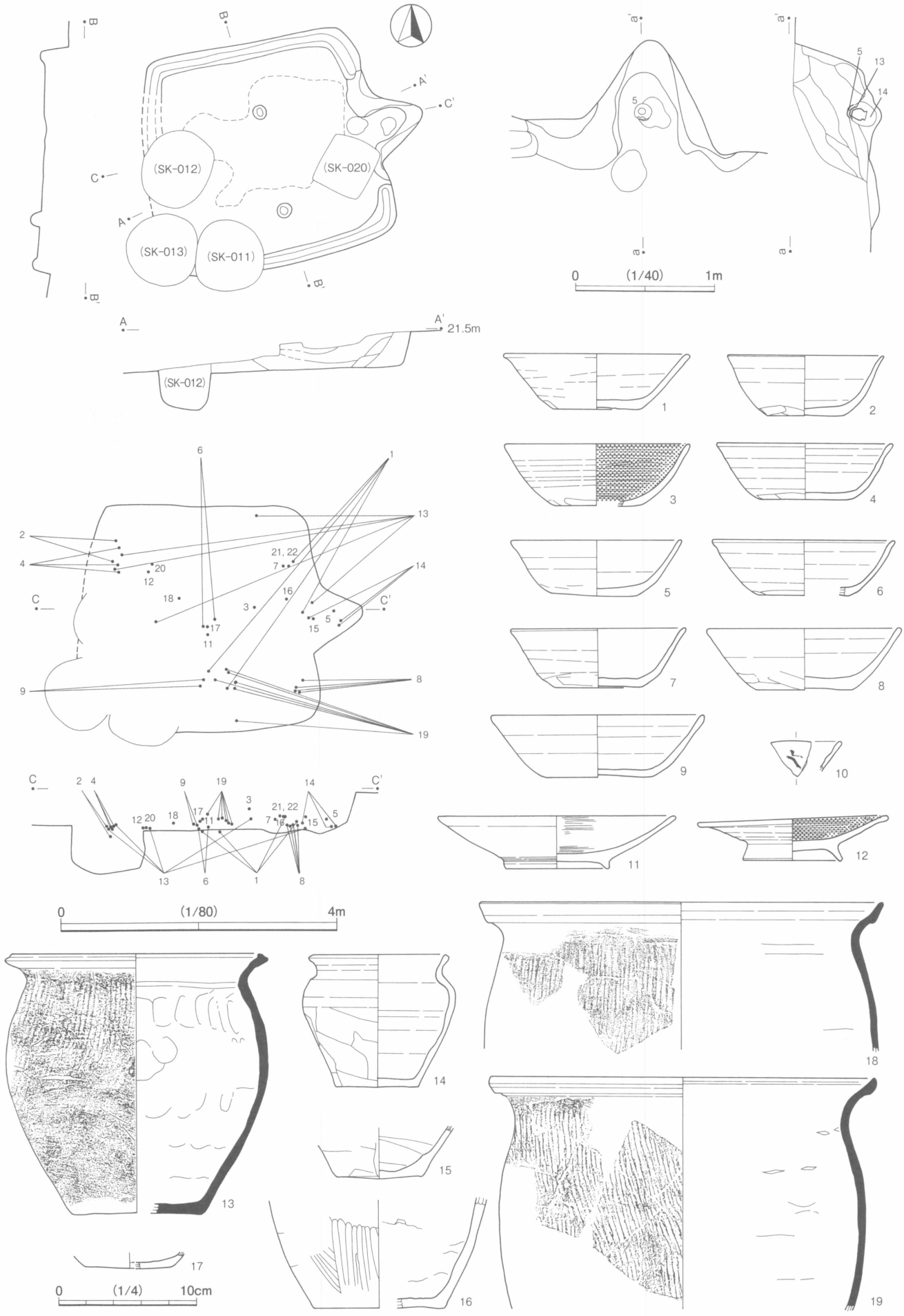


第17図　SI-005

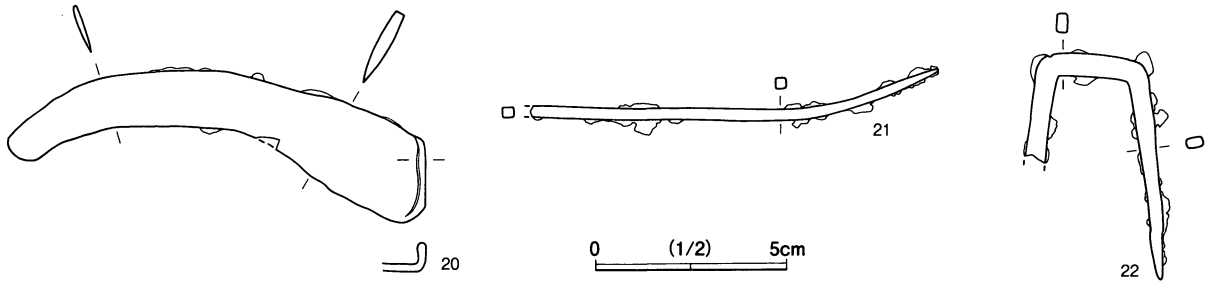
SI-008（第18，19図，図版７，13，15，17）

SK-011，012，013，020によって壁面や床面が攪乱を受ける。カマドを通る軸長が3.3m，直交する軸が同じく3.3mであるが，全体に台形状の平面形態である。床面の深さは最大で0.5mほどになる。床面中央には硬化面がある。主柱穴はなく２か所でピットを検出した。深さは15cm弱と浅いものである。貼り床硬化面を除去したところ，中央に浅い掘り込みが現れたが，深さは10cm余りと非常に浅く，柱穴とはならない。床面が赤褐色に被熱したか所がある。ただし，覆土には焼土を含まない。カマドは煙道部を住居壁面から0.6mほど掘り込んでいるが両袖の残りは悪い。カマドの燃焼部中心には土師器小型甕（14）を逆さにして，その上に須恵器甕底部片（13）と土師器杯（5）とを順に逆さにして重ねた状態で出土した。須恵器甕は口縁部の一部がやや離れた地点から出土している。復元すると完形になり，調査時の観察ではその須恵器甕内部には真っ赤な焼土が充填され，口縁付近は粘土でふさいだようである。この３点で支脚としていたのであろう。

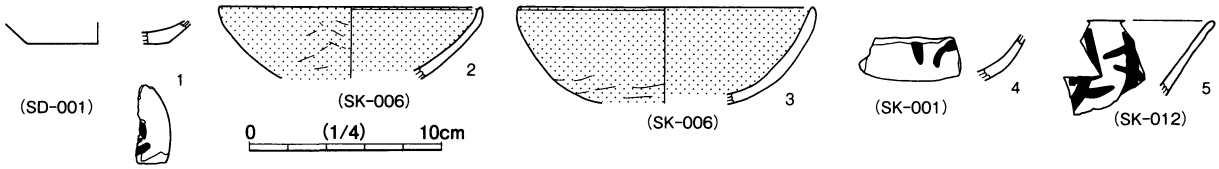
１は全体の80％が残存する土師器杯で体部は直線的に伸びる。口径13.4cm，底径6.3cm，器高4.0cmになる。底部は手持ちヘラケズリ，外縁は同じく手持ちヘラケズリである。２は土師器杯片で，スコリアの多さが目立つ。口径推定11.4cmである。底部には回転ヘラケズリ痕が見られる。体部の立ち上がりは緩やかで，大きく内湾するが，逆に口縁端はやや外反する。３は内面ヘラミガキ・黒色処理する土師器杯片である。雲母やスコリアが目立つ。体部は緩やかに内湾するタイプである。口径は推定13.4cmになる。４は土師器杯で，全体の約50％が残存する。内面見込みは摩滅している。口径推定12.6cm，底径6.2cm，器高4.1cmである。底部には回転か静止かはっきりわからないが，糸切り痕があり，その後ヘラケズリ調整している。５は全体の80％が残る土師器杯であるが，軟質で器面が溶けている。また，内面は被熱しちぢれている。口径12.3cm，底径5.7cm，器高4.1cmである。底部はヘラケズリ調整を施している。６は土師器杯で底部は欠損している。口径は13.4cmである。７は土師器杯で約半分が残存する。口径12.7cm，底径6.2cm，器高4.3cmである。８はやや大ぶりの土師器杯で，底部は回転糸切り離し後周辺をヘラケズリ調整している。口径14.2cm，底径7.0cm，器高4.4cmになる。９はさらに大ぶりな土師器杯で，軟質で器面が溶けてしまっているため，調整不明である。口径15.4cm，底径7.6cm，器高4.1cmになる。10は土師器杯の口縁部付近にかかれた墨書で，破片のため文字は判読できない。11は高台付き土師器皿の破片である。復元したもので口径16.2cm，高台径7.6cm，器高3.8cmになる。付け高台の周縁にはヘラと思われる工具痕の筋が多数見られる。内面はヘラミガキ調整する。12はほぼ完形の高台付き土師器皿で，内面はヘラミガキ，黒色処理を施す。付け高台の裏にはヘラ削り痕が見られる。口径13.8cm，高台径7.2cm，器高3.3cmになる。焼成は良好。13は小型の須恵器甕で，全体の40％ほどが残存する。硬質で焼成良好，内外面とも暗褐色に発色する。肩部は縦方向の平行タタキ目，下半部はヘラケズリ，内面にはナデ痕が見られる。14はほぼ完形の土師器小型甕で，薄手で外面下半は幅広のヘラケズリ，内面はナデ調整を施す。胎土は密で硬質である。15は土師器甕の底部のみの破片になる。胎土は緻密・硬質で，外面には稜線がシャープなヘラケズリ，内面にはナデ痕が見られる。底部はヘラケズリ調整になる。内外面とも被熱している。16は胎土中に大粒の長石，石英を多量に含む常総型甕の底部片である。外面には細かい幅のヘラミガキが，内面には粗いナデ調整痕が見られる。褐色に発色する。17は土師器杯の底部片である。18は県内産の須恵器甕の上半部片である。復元すると口径は29.5cmとかなり大型になる。胎土中に砂粒を多量に含み，器面がザラザラした感じである。外面は縦方向の平行タタキ目で内面はナデ調整している。口縁端は外側に折り重ねている。19は須恵器甑の上半部片



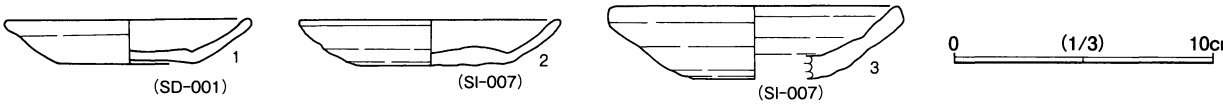
第18図　SI-008（1）



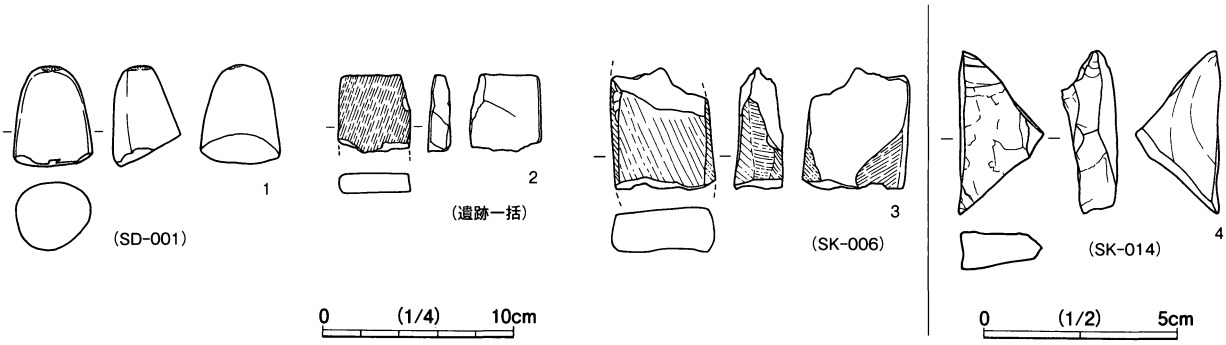
第19図　SI-008（2）



第20図　その他出土遺物



第21図　カワラケ



第22図　石製品

である。県内産で外面は平行タタキ目，内面にはユビ圧痕が見られる。胎土中には長石，雲母，スコリアが含まれる。焼成は良好で硬質で茶褐色に発色する。口径は推定28.0cmになる。20は鉄製の鎌で片面に木質が付着している。21は断面方形で細長く，鉄鏃の棒状部になるかもしれない。22は鋤型の鉄製品である。21と22は錆付している。

その他出土遺物（第20図，図版15）

墨書土器が３点（１，４，５）出土している。いずれも破片で文字の判読はできない。

5　中・近世

遺構　中世から近世にかけての溝状遺構７条，土坑１基，土坑列１条，土坑墓７基，ピット群１基を検出した。

溝状遺構

SD-001（SD-003・005）（第23図，図版８）

調査地区の西端からほぼ真東の方向に延びる浅い溝である。中間地点を境に西と東で様相が変わる。西側では２段になるが，東側ではSD-003とSD-005に分岐する。中間点は竪穴住居跡SI-004，005と重複して，その掘り込みの浅さが災いし，平面形態が不明瞭になってしまっている。切り合い関係の観察から土坑列より新しい。SD-005では床面に硬化面を確認している。よって，道路として使われていた時期があったのであろう。近世以降の比較的新しい時期の境界溝（兼道路）と思われる。

SD-002（SD-004）（第23図，図版９）

SD-002とSD-004は調査時期差によって別々の名称が付けられてしまっているが，同じ遺構になる。調査区中央付近で大きく北側に湾曲する。西側は攪乱によって削平されてしまっている。その湾曲した地点のすぐ南側には無数の柱穴やピットが掘られている。墓域の中心に位置し，掘立柱建物が造られていた形跡であろう。この溝によって墓域と遺構の存在しない台地部とが区切られている。断面形態は逆台形で，覆土中層は硬化している。道路として使われていた時期があったようだ。

SD-006（第23図，図版９）

SD-002と0.4mの間をおき，2D41グリッドあたりから北方向に大きく湾曲する。掘り込みは10cm余りと非常に浅い。

SD-007（第23図）

SD-002から2C56グリッドあたりで南方向に派生する遺構である。緩やかな浅い掘り込みである。南にさらに延伸するが，大きく攪乱を受けている。

SD-008（第23図，図版８）

ピット群と重複する位置に，弧を描くように掘られた溝状遺構である。長さはおよそ６mと比較的短く，深さは0.45mで断面はU字型になる。ピット群との新旧関係ははっきりしない。SD-004と平行しているが，それに比べて極端に長さが短い。

土坑

SK-001（第24図，図版８）

調査区中程事業地境から検出した。覆土中には細かいローム粒を含み均質で，多くの土師器杯，甕片や砂混じりの粘土塊が出土している。底面は平坦だが，立ち上がりは緩やかで鍋底形態になる。平面形態は円形で上端1.3m，下端0.8m，深さ0.5mになる。

土坑墓

SK-006（第24図，図版８）

比較的大きな土坑で，隅丸長方形になる。上端で一辺1.1m×1.5m，下端で0.8m×1.3mで，深さ0.6mを測る。床面は北側半分がさらに浅く丸底状にくぼむ。底面は全体としては平坦で，壁の立ち上がりは明瞭，

壁面も直線的に伸びる。覆土は締まりが良好で，全体に黄色味を帯びている。中世の土坑墓であろうか。

SK-007（第24図）

調査区東端に位置する土坑墓である。平面形態は台形状の隅丸方形で上端で0.56m×0.64m，深さ0.06mになる。旧石器時代の確認調査を実施中に検出されたため，底面がかなり浅くなってしまった。したがって図面は本来の深さを表していない。唐銭と北宋銭からなる六道銭（皇宋通寶１，大暦元寶１，政和通寶１，開元通寶１，聖宋元寶１，元符通寶１）が出土したことから15世紀前半ころの土坑墓と考えられる。

SK-010（第24図，図版８）

小型の隅丸方形の土坑である。上端で1.0m×1.0m，深さ0.7mになる。覆土下部はボロボロとして脆い。覆土中から北宋銭（皇宋通寶）が１点出土している。他に歯を検出したが，脆く調査時に崩れてしまった。中世土坑墓と考えられる。

SK-013（SK-011・012）（第24図，図版７）

SK-011とSK-012が近接する。上端直径1.1m，下端直径0.8m，深さ1.4m以上のほぼ円筒形の堀方である。SK-013から出土した寛永通寶６点のうち５点が裏面に「文」の文字を鋳出している。この種の寛永通寶は寛文年間（1668～1696）に鋳造されたもので，この遺構も同時期の土坑墓（座棺）と判断される。SK-011，012も時期差のほとんどない土坑墓と考えられる。

SK-020（第24図）

SI-008内のカマド脇に位置する。竪穴住居を調査中に，土坑の平面形態が次第にわかるようになり，加えて六道銭も覆土から出土したことで中世土坑墓と認識された。調査も同時に行ったため遺物番号はSI-008の通し番号として取り上げている。この六道銭は６点のうち２点が永楽通寶すなわち明銭で，他の４点は北宋銭（政和通寶２，太平通寶１，景祐元寶１）になる。他に土坑墓に伴う骨（片）などの遺物はない。15世紀後半以降の土坑墓であろう。

土坑列（第24図，図版８）

北から順にSK-005～SK-002～SK-004～SK-003～SK-008からなる遺構である。各土坑間の芯々距離は1.5m，1.4m，1.4m，1.5mとほぼ等間隔である。調査時点ではきれいに一直線に並ぶ土坑の列と捉えたが，本来この土坑列には溝状遺構が伴い，溝の最も深い部分に均等な距離を置いて土坑を掘ったもので，この溝は全体に削平が進んでいたり，浅かったりした場合残存しないことが多々ある。今回もおそらく溝が存在していたであろうが，全体的な削平が進んでいて確認できなかったもので，調査区外へ延伸するものと判断したい。個々の土坑は丸底状になっていて，下端の線は不明瞭である。この形態の遺構には馬土手など片側に土手を伴う例があり，一般的には外部からの小・中型害獣の侵入を防ぐ目的および追い込む目的でつくられたものである。特徴ある遺物は出土していない。

ピット群（第23図，図版８）

2C30グリッドから2C34グリッドの間の約30㎡の狭い範囲に集中する。南側にも分布範囲が広がるであろうが，攪乱によって削平され広がりを追うことができない。深さはまちまちであるが，60cmほどのものもあり，したがってこれらはかなりのものが掘立柱建物跡の柱を構成するであろうが，部分発掘で不確定部分が多いため，今回はこれ以上の推測は行わない。SD-008と切り合っている。重複するSI-007の遺物

として取り上げたものの中に，形態の全く異なる近世カワラケ（第21図２，３）が存在する。これはピット群に伴う遺物と考えるのが妥当であろう。したがって上限ははっきりしないが，近世にはこの地点に掘立柱建物が造られていた可能性が高い。

遺物

カワラケ（第21図，図版15）

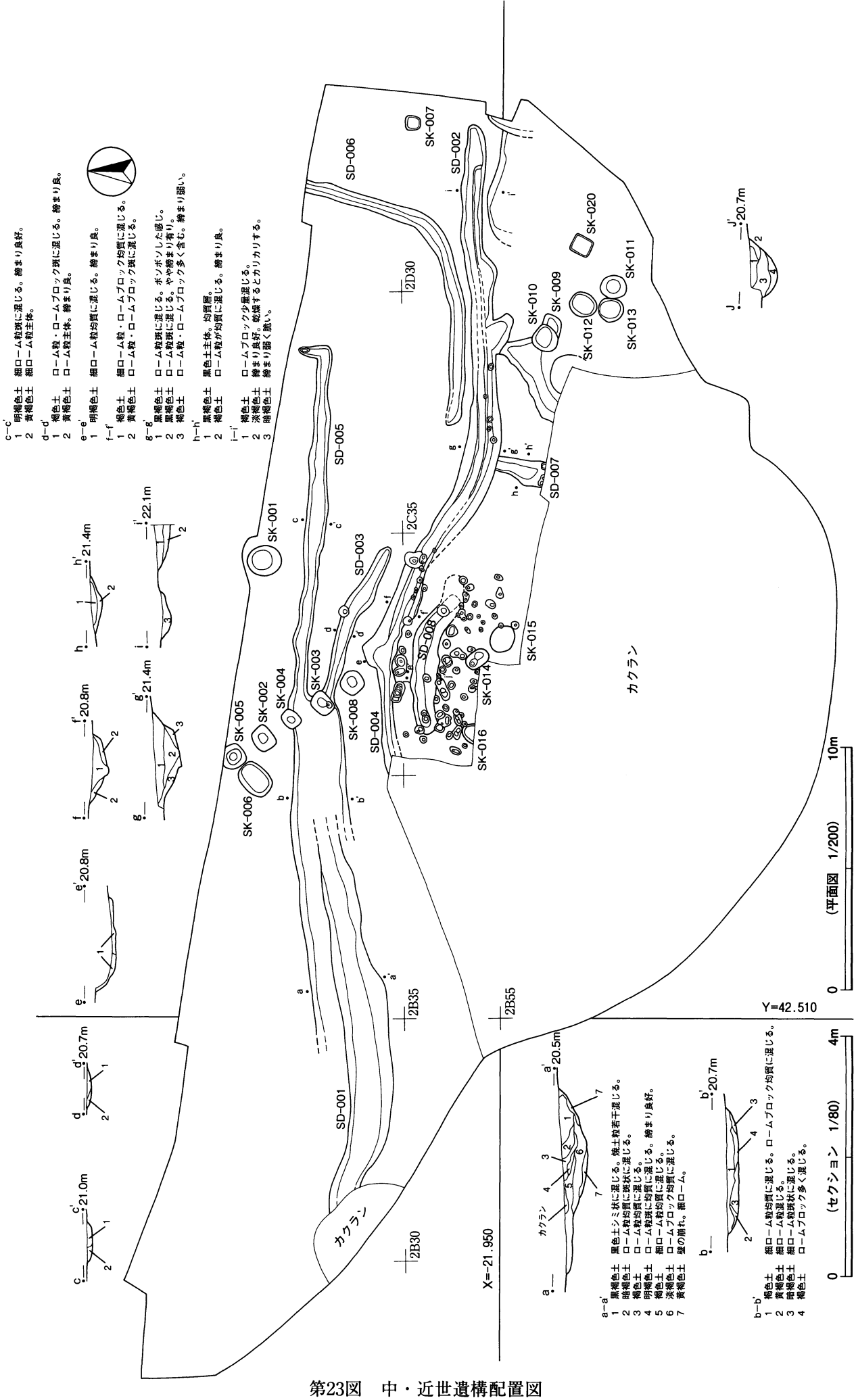
近世カワラケが３点出土している。３は中世的な杯型だが底部を欠損している。他の２点は皿形である。２に比べ１の方が薄手均質でやや新しくなる。底部と体部の接合部が極めて薄く窪んでいるのが特徴である。

石製品（第22図，図版15）

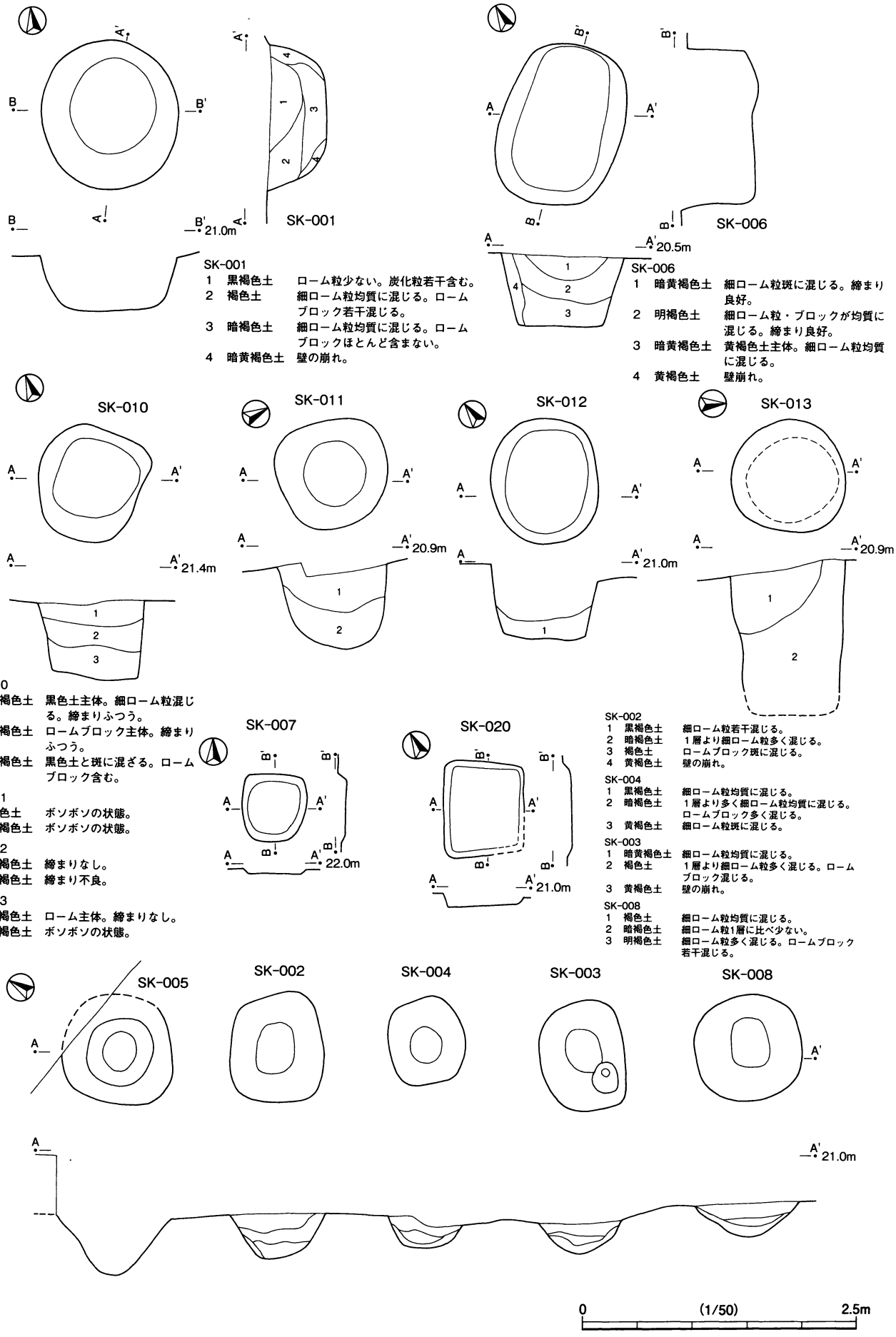
２は砂岩製の砥石，３は凝灰岩製の砥石で下半部が欠損している。４はメノウの剥片で，特に使用痕はない。

銭貨（表１，第25～28図，図版16，17）

中・近世で最も多量に出土している遺物は銭貨で，なかでも寛永通寶が圧倒的である。表１にまとめたものは83点であるが，表に記載していない互いに癒着しボロボロとなった銭貨が20点前後あるので，その結果総点数は100点前後にのぼる。調査地点が墓地だったことから，銭貨が出土するのは容易に想定できるものである。すなわちほとんどが遺体とともに埋葬された六道銭に他ならない。埋葬の際は銭貨は束ねられていたようで，他の銭貨との圧着の痕跡を残すものが非常に多い。また圧着した銭貨の空間内ではその金属成分が溶け出すのであろうか，表面に藍色の薄い皮膜が認められるものが多い。54点の出土位置が遺跡一括になっているのは，調査直前の遺骨改葬の際に掘り起こされたものである。



第23図　中・近世遺構配置図



SK-001
1 黒褐色土　ローム粒少ない。炭化粒若干含む。
2 褐色土　細ローム粒均質に混じる。ローム ブロック若干混じる。
3 暗褐色土　細ローム粒均質に混じる。ローム ブロックほとんど含まない。
4 暗黄褐色土　壁の崩れ。

SK-006
1 暗黄褐色土　細ローム粒斑に混じる。締まり良好。
2 明褐色土　細ローム粒・ブロックが均質に混じる。締まり良好。
3 暗黄褐色土　黄褐色土主体。細ローム粒均質に混じる。
4 黄褐色土　壁崩れ。

SK-010
1 黒褐色土　黒色土主体。細ローム粒混じる。締まりふつう。
2 黄褐色土　ロームブロック主体。締まりふつう。
3 黒褐色土　黒色土と斑に混ざる。ローム ブロック含む。

SK-011
1 褐色土　ボソボソの状態。
2 暗褐色土　ボソボソの状態。

SK-012
1 黒褐色土　締まりなし。
2 暗褐色土　締まり不良。

SK-013
1 暗褐色土　ローム主体。締まりなし。
2 暗褐色土　ボソボソの状態。

SK-002
1 黒褐色土　細ローム粒若干混じる。
2 暗褐色土　1層より細ローム粒多く混じる。
3 褐色土　ロームブロック斑に混じる。
4 黄褐色土　壁の崩れ。

SK-004
1 黒褐色土　細ローム粒均質に混じる。
2 暗褐色土　1層より多く細ローム粒均質に混じる。ロームブロック多く混じる。
3 黄褐色土　細ローム粒斑に混じる。

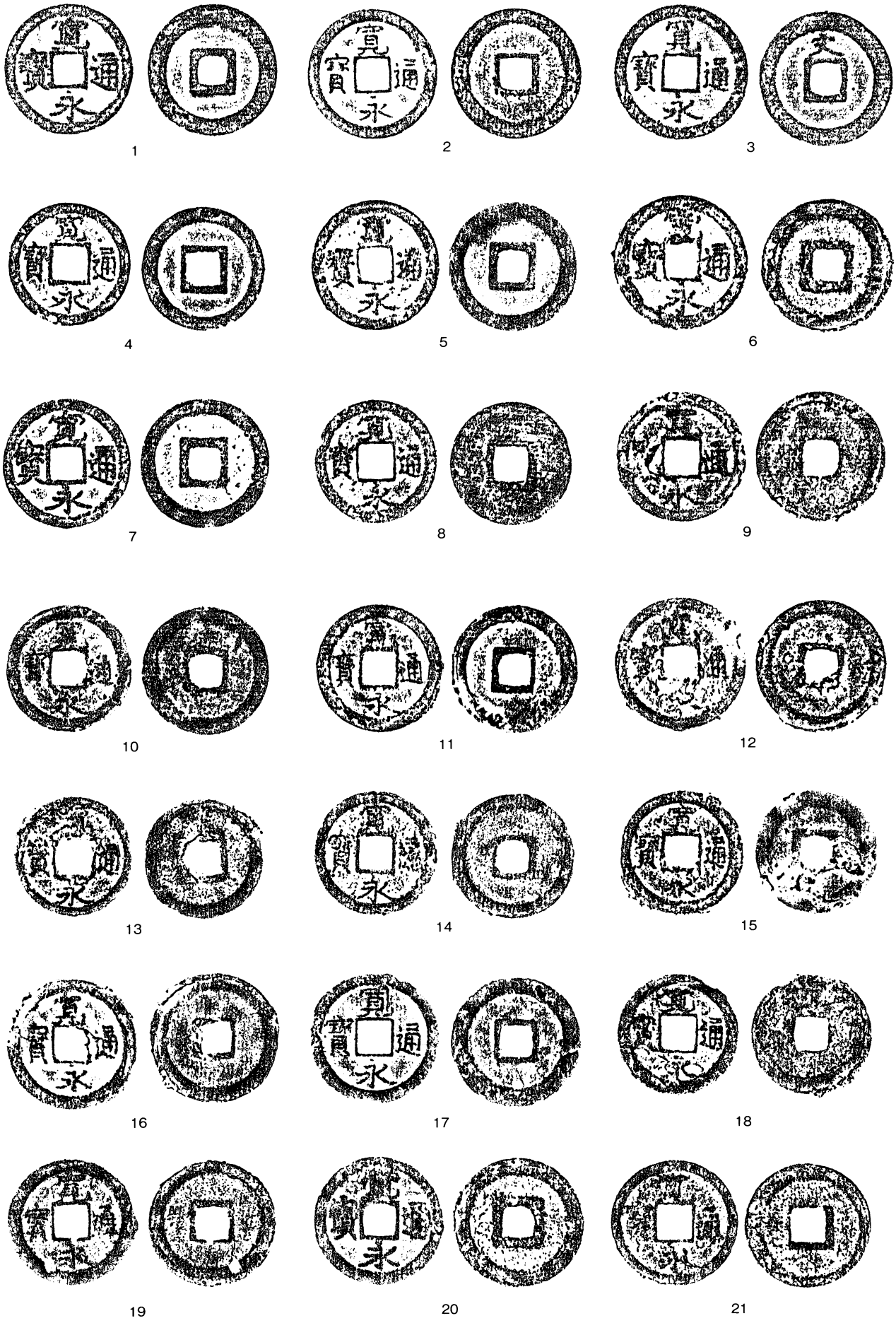
SK-003
1 暗黄褐色土　細ローム粒均質に混じる。
2 褐色土　1層より細ローム粒多く混じる。ローム ブロック混じる。
3 黄褐色土　壁の崩れ。

SK-008
1 褐色土　細ローム粒均質に混じる。
2 暗褐色土　細ローム粒1層に比べ少ない。
3 明褐色土　細ローム粒多く混じる。ロームブロック若干混じる。

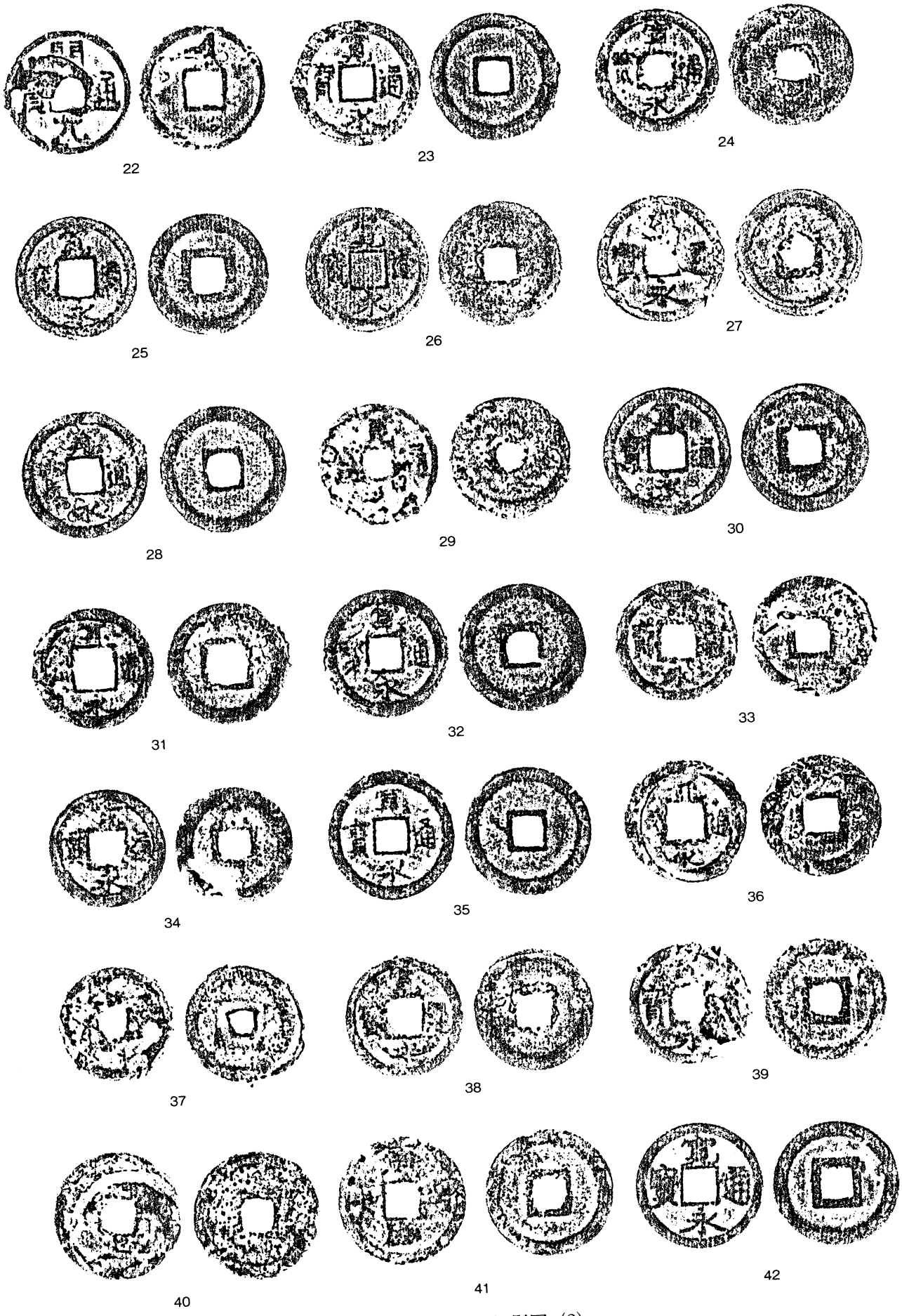
第24図　土坑・土坑墓・土坑列

表１　出土銭貨一覧

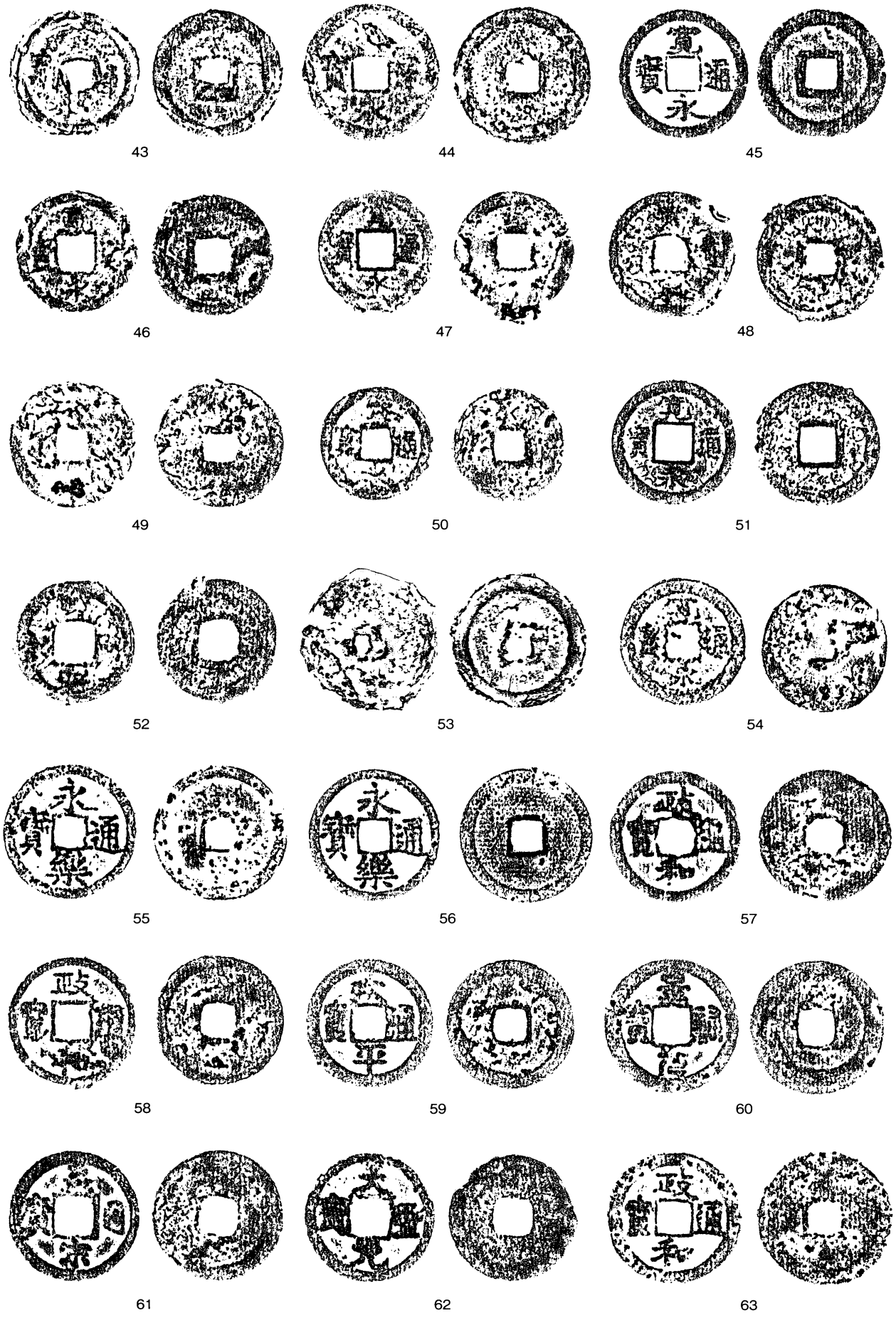
番号	銭貨名	計測値（単位：mm）					重量（g）	出土位置	備考（王朝，初鋳年等）
		縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚			
1	寛永通寶	24.0	19.0	6.5	5.0	1.1	3.20	遺跡一括	
2	寛永通寶	24.0	18.3	6.5	5.7	1.3	3.22	遺跡一括	
3	寛永通寶	24.9	17.6	7.2	5.7	1.2	3.68	遺跡一括	背「文」
4	寛永通寶	22.9	17.6	7.0	5.7	1.1	2.60	遺跡一括	
5	寛永通寶	23.9	19.0	6.6	5.7	1.1	3.09	遺跡一括	付着物(藍色)
6	寛永通寶	24.6	18.6	6.6	5.7	1.2	3.33	遺跡一括	
7	寛永通寶	23.9	18.5	7.1	5.8	1.1	3.36	遺跡一括	付着物(藍色)
8	寛永通寶	22.7	17.8	7.6	6.4	0.9	2.44	遺跡一括	
9	寛永通寶	24.2	20.2	7.6	6.2	1.1	2.64	遺跡一括	鉄錆付着
10	寛永通寶	23.4	19.3	6.9	5.9	1.1	3.11	遺跡一括	
11	寛永通寶	23.5	18.0	6.4	5.7	1.1	3.04	遺跡一括	鉄錆付着
12	寛永通寶	24.2	20.5	6.6	5.5	1.0	2.63	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
13	寛永通寶	22.4	20.2	7.6	6.3	0.9	2.31	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
14	寛永通寶	23.2	19.6	5.4	5.9	1.1	2.96	遺跡一括	付着物(藍色)
15	寛永通寶	23.0	17.8	7.4	5.4	1.2	3.38	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
16	寛永通寶	24.2	19.2	6.9	5.7	1.3	3.56	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
17	寛永通寶	24.3	18.3	6.2	6.0	1.2	2.74	遺跡一括	
18	寛永通寶	22.1	17.7	7.0	6.2	1.0	2.50	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
19	寛永通寶	23.5	19.3	6.8	6.1	1.0	2.75	遺跡一括	付着物(藍色)
20	寛永通寶	24.4	19.6	6.7	5.8	1.1	2.96	遺跡一括	付着物(藍色)
21	寛永通寶	23.6	20.1	6.9	6.6	1.1	3.38	遺跡一括	付着物有り
22	開元通寶	23.5	19.6	7.3	6.1	1.2	3.08	遺跡一括	付着物(藍色)
23	寛永通寶	24.1	18.4	7.1	5.7	1.2	3.54	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
24	寛永通寶	23.0	18.0	6.9	5.9	1.2	2.87	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
25	寛永通寶	23.1	18.6	7.2	6.5	1.0	2.19	遺跡一括	付着物(藍色)
26	寛永通寶	23.4	19.8	6.8	6.2	1.2	2.77	遺跡一括	付着物(藍色)
27	寛永通寶	23.7	18.9	6.1	4.7	1.2	3.26	遺跡一括	付着物(藍色)
28	寛永通寶	23.7	18.9	6.9	6.2	1.0	2.13	遺跡一括	
29	寛永通寶	23.2	18.8	5.8	4.4	1.5	4.86	遺跡一括	鉄錆付着
30	寛永通寶	24.2	19.6	6.5	6.3	1.3	3.87	遺跡一括	付着物有り
31	寛永通寶	22.8	19.1	8.0	7.3	1.1	2.34	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
32	寛永通寶	24.0	18.4	6.7	5.8	1.2	2.96	遺跡一括	付着物(藍色)
33	寛永通寶	22.7	18.3	7.2	6.3	1.1	2.82	遺跡一括	鉄錆付着
34	寛永通寶	21.8	17.3	6.8	5.6	1.1	2.29	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
35	寛永通寶	24.1	18.8	6.3	5.8	1.3	3.15	遺跡一括	付着物(藍色)
36	寛永通寶	22.8	17.3	7.2	5.6	1.3	2.98	遺跡一括	
37	判読不能	21.9	18.1	7.3	4.2	1.3	2.56	遺跡一括	付着物(藍色)
38	寛永通寶	22.5	18.6	6.6	6.2	1.0	2.54	遺跡一括	付着物(藍色)
39	寛永通寶	22.8	17.2	5.8	6.0	1.1	2.75	遺跡一括	鉄錆付着
40	寛永通寶	24.4	19.8	5.4	5.9	1.4	2.96	遺跡一括	
41	寛永通寶	24.2	19.9	6.7	6.5	1.2	3.27	遺跡一括	
42	寛永通寶	23.8	20.4	7.1	5.9	1.3	3.60	遺跡一括	
43	寛永通寶	23.5	19.0	5.5	3.8	1.2	2.97	遺跡一括	鉄錆付着，付着物(藍色)
44	寛永通寶	25.5	20.9	6.3	5.6	1.2	3.13	遺跡一括	鉄錆付着
45	寛永通寶	23.8	18.7	5.8	5.5	1.1	2.78	遺跡一括	
46	寛永通寶	22.8	17.2	7.1	6.4	1.0	2.59	遺跡一括	付着物(藍色)
47	寛永通寶	21.5	17.2	7.5	6.3	0.9	1.96	遺跡一括	鉄錆付着
48	寛永通寶	23.0	18.8	6.6	5.6	1.2	2.96	遺跡一括	付着物(藍色)
49	判読不能	23.6	測定不能	5.5	5.1	1.1	2.76	遺跡一括	鉄錆付着
50	寛永通寶	21.2	15.8	6.0	5.4	1.3	2.18	遺跡一括	鉄錆付着
51	寛永通寶	22.9	18.1	7.6	6.4	1.0	2.16	遺跡一括	付着物(藍色)
52	判読不能	22.6	18.4	7.7	7.4	1.1	2.58	遺跡一括	付着物(藍色)
53	判読不能	26.1	18.8	6.4	4.0	1.5	4.15	遺跡一括	鉄錆付着
54	寛永通寶	23.3	17.8	6.4	4.8	1.3	2.74	遺跡一括	付着物(藍色)
55	永楽通寶	24.8	20.0	6.3	5.4	1.5	3.37	SK-020	明，1408
56	永楽通寶	24.9	20.1	6.1	5.7	1.3	2.86	SK-020	明，1408
57	政和通寶	24.2	19.6	6.8	6.2	0.8	1.85	SK-020	北宋，1111
58	政和通寶	23.6	20.0	6.9	6.2	1.1	3.17	SK-020	北宋，1111
59	太平通寶	23.8	18.2	6.3	6.2	1.1	3.25	SK-020	北宋，976
60	景祐元寶	24.6	18.3	7.7	6.5	1.1	3.36	SK-020	北宋，1034
61	皇宋通寶	24.4	20.5	6.9	6.7	1.0	2.86	SK-007	北宋，1038
62	大暦元寶	24.0	20.1	7.4	6.7	1.0	2.16	SK-007	唐，769
63	政和通寶	24.6	18.6	6.8	5.7	1.2	3.38	SK-007	北宋，1111
64	開元通寶	23.5	18.1	7.4	6.5	1.5	3.58	SK-007	唐，621
65	聖宋元寶	23.9	18.7	6.3	5.9	1.4	2.91	SK-007	北宋，1101
66	元符通寶	23.7	17.5	6.9	6.1	1.1	2.28	SK-007	北宋，1098
67	寛永通寶	25.1	19.4	6.3	5.9	1.3	3.44	SK-013	背「文」
68	寛永通寶	24.8	19.8	6.7	5.9	1.4	4.00	SK-013	
69	寛永通寶	24.9	20.0	6.6	5.6	1.3	3.88	SK-013	背「文」
70	寛永通寶	24.8	19.1	6.5	5.6	1.4	3.73	SK-013	背「文」
71	寛永通寶	25.1	19.9	6.3	5.5	1.3	3.94	SK-013	背「文」
72	寛永通寶	24.9	19.6	6.2	6.0	1.1	3.16	SK-013	背「文」
73	皇宋通寶	24.3	18.4	7.2	7.0	1.1	2.29	SK-010	北宋，1038
74	寛永通寶	23.4	18.5	6.5	6.0	1.1	2.55	SK-014	付着物有り



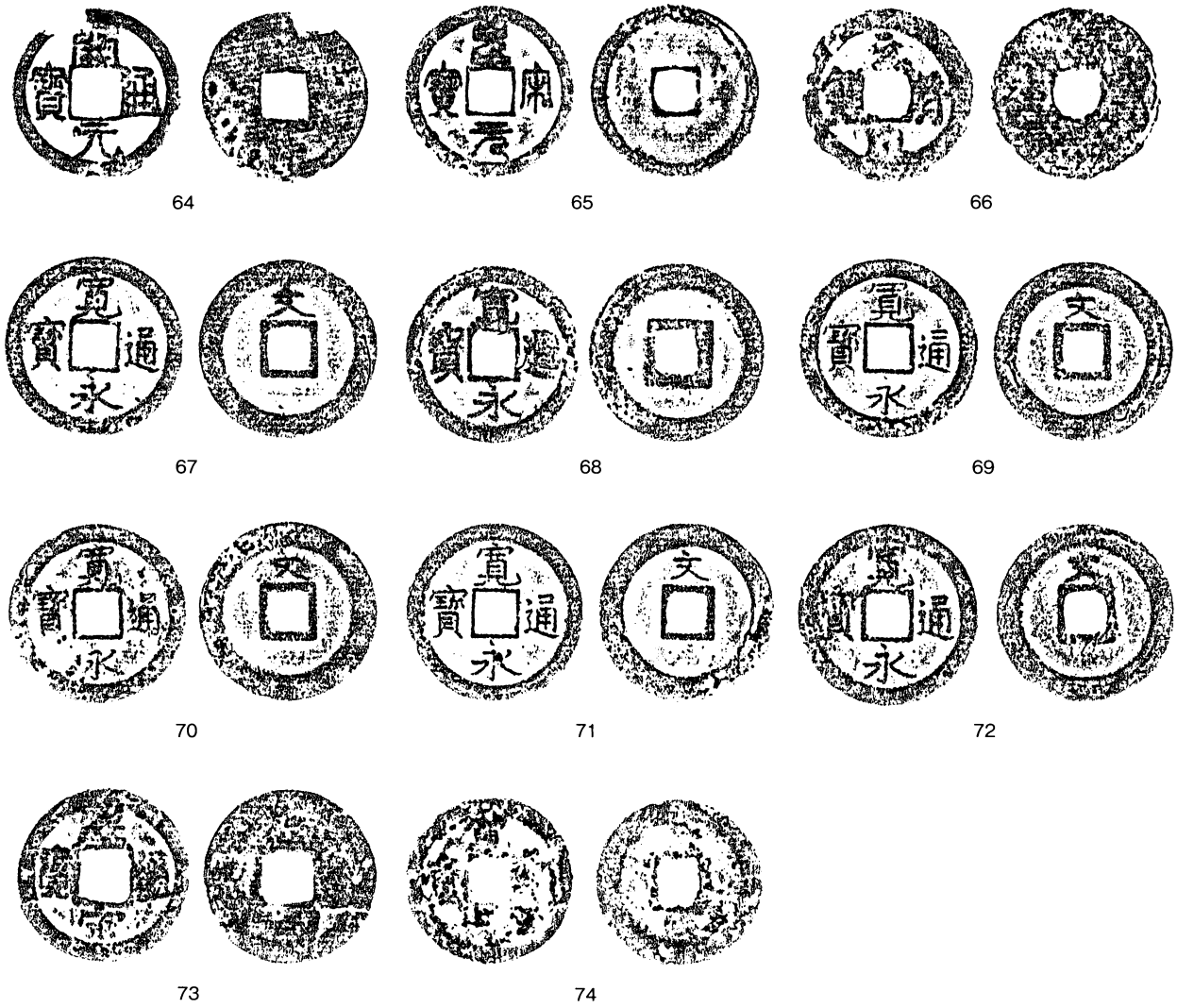
第25図　銭貨拓影図（1）



第26図　銭貨拓影図（2）



第27図　銭貨拓影図（3）



第28図　銭貨拓影図（4）

Ⅲ　まとめ

今回の調査では弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が２軒，古墳時代後期の竪穴住居跡が３軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡が３軒検出され，中・近世では溝状遺構７条，土坑1基，土坑墓７基，土坑列１条，ピット群１基が検出された。（第29図）

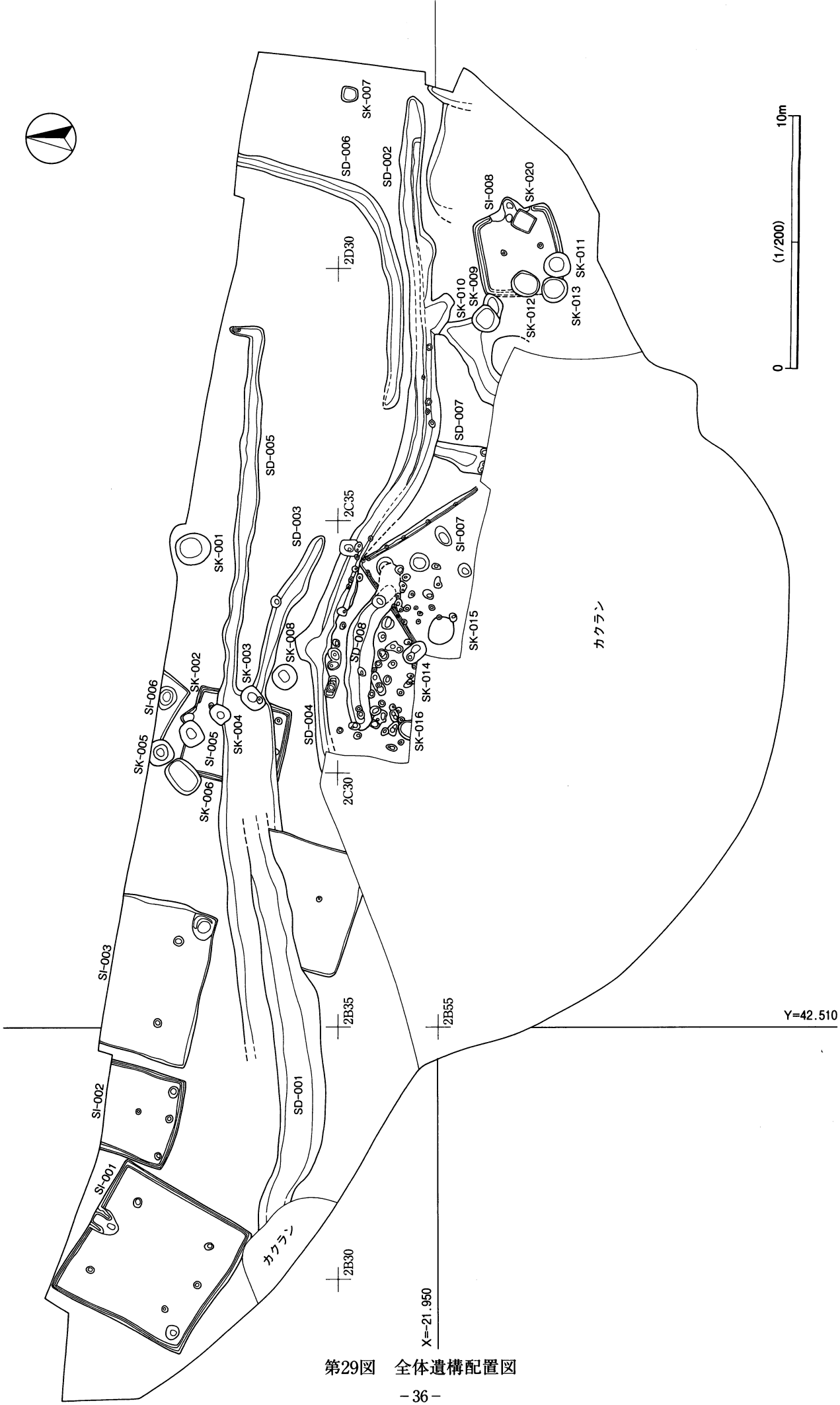
調査面積が少ないため，遺跡全容についてふれることは避け，いくつか気づいた点を述べることとする。

かねてから成田市域では根木名川本流を中心とした支流である尾羽根川，荒海川，取香川，小橋川水系に多くの弥生時代の遺跡が点在し，特に取香川流域がその中心であることが知られていた。その土器はすべてが後期を主体としており，多くの遺跡で印旛・手賀沼系土器が出土している。押畑広台遺跡近くの関戸遺跡は取香川と根木名川が合流する流域遺跡であり，南羽鳥タダメキ第２遺跡は根木名川支流の長津川流域遺跡に該当する。今回の調査地点は小橋川流域においてやや少ない感のあった同期の新たな資料を提供し，補完するような結果となったと考える。

古墳時代後期の竪穴住居跡は３軒検出された。SI-001は一辺およそ６ｍの大型の竪穴住居跡で６世紀前半から７世紀半ば頃までの幅広い時期の遺物が出土しているが，住居跡は６世紀前半か多少古いころのものと考えられる。内面中央に縦方向の幅広の赤彩を施す土師器杯をはじめ全面に赤彩する杯や高坏がまとまって出土していることが特徴である。SI-003やSI-007にも赤彩土師器杯が出土しており，やや古い様相ではあるが６世紀前葉前後のものであろう。

続いて時期的にはやや間隔が開くが８世紀後半から９世紀にかけての竪穴住居跡を検出した。SI-008は８世紀から９世紀代，SI-002，005は９世紀代であろう。県内産須恵器甕も出土している。相対的に古墳時代の遺物に比べ絶対量が少ない同期の遺物中で，墨書を残す土器（片）が計10点出土しているのが大きな特徴である。「東」，「本」の墨書は土師器杯体部外面に書かれている。その他土師器杯体部外面に墨書するものは７点，底部に書かれたものが１点であるが，いずれも一部を残すのみで判読できない。

中世には墓域であったためか同期の出土遺物量は極端に少ない中で目立つのが銭貨である。その内資料的に充実した遺構を分析すると，SK-007から出土している６点の銭貨は唐銭と北宋銭である。SK-010からも北宋銭が１点出土している。SK-020から出土しているのは６枚の明銭，北宋銭である。SK-013ではすべて寛永通寶である。各銭貨の生産・流通時期を考慮して，強いてまとめるならばSK-007（15世紀前半），SK-020（15世紀後半以降），SK-013｛寛文年間（1668～1696）以降｝の順に新しくなるであろう。中世のどの時期まで遡れるかは判然としないが，唐銭・北宋銭のみから構成される土坑墓の存在から，遅くとも15世紀前半頃には当地域が墓域化していたものと思われる。なお，溝状遺構SD-004以南の台地縁辺に集中するピット群はおそらくそのいくつかが掘立柱建物跡に組み合わせられるのであろうが，一部調査であり，図面のみでは組み合わせは判然としない。したがって今回は強いて柱の組み合わせはしなかった。以上から見ると，確実に墓域と考えられるのは調査区東側に集中しているように見受けられるが，もちろん南側の撹乱域にも展開していた可能性は高い。SD-002（004）・006が墓域と外縁との境界となっていたのであろう。いずれにしても当地点は中世後期から確実に墓域であり，それが中世末期，近世，現代へと脈々と続いてきたものである。



第29図　全体遺構配置図

写　真　図　版

遺跡周辺航空写真（1/10,000）

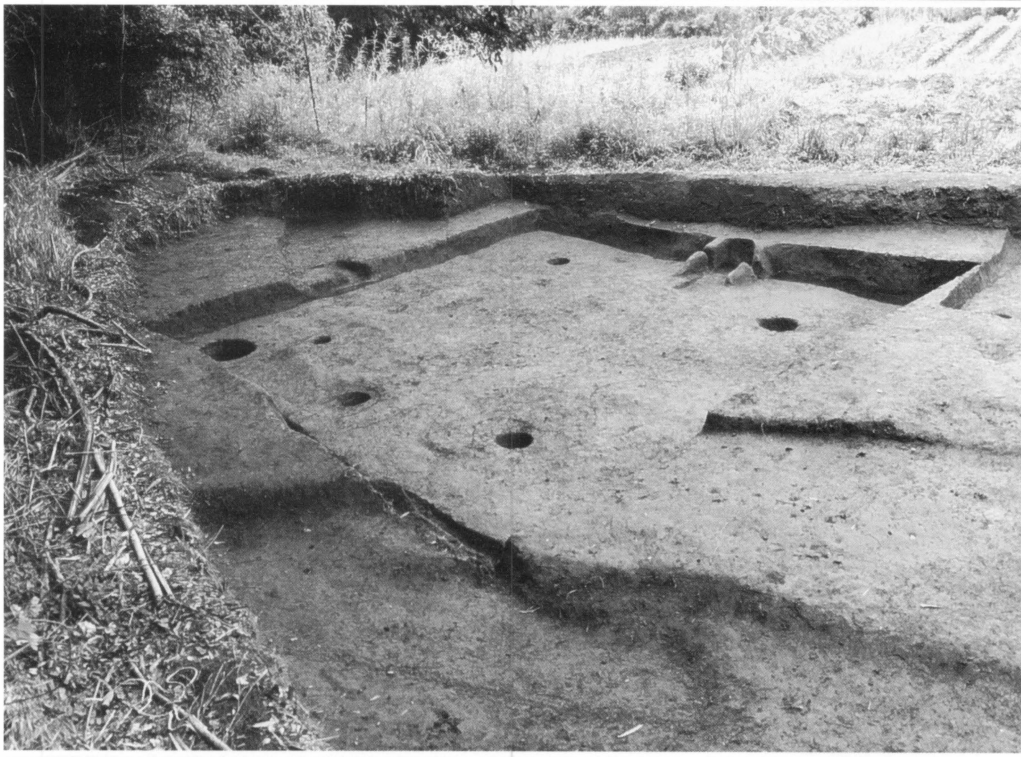
図版２

遺跡遠景（北西から）

調査地点（遺骨収集後の状況）

西側全景

SI-001遺物出土状況

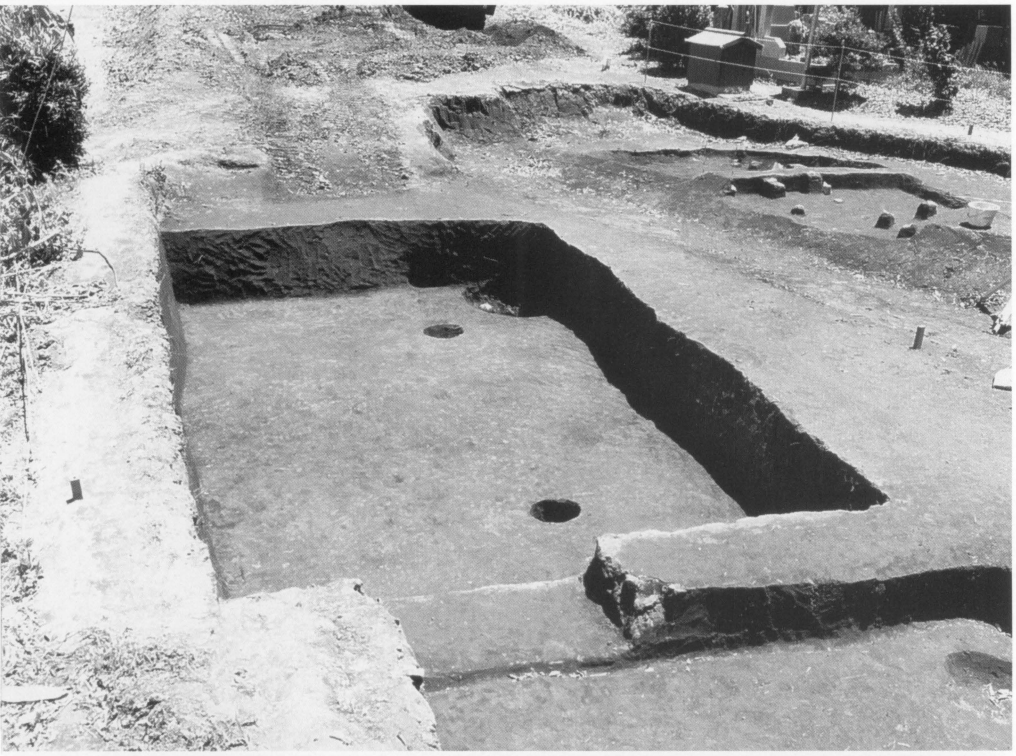


SI-001全景

SI-001カマド

図版4

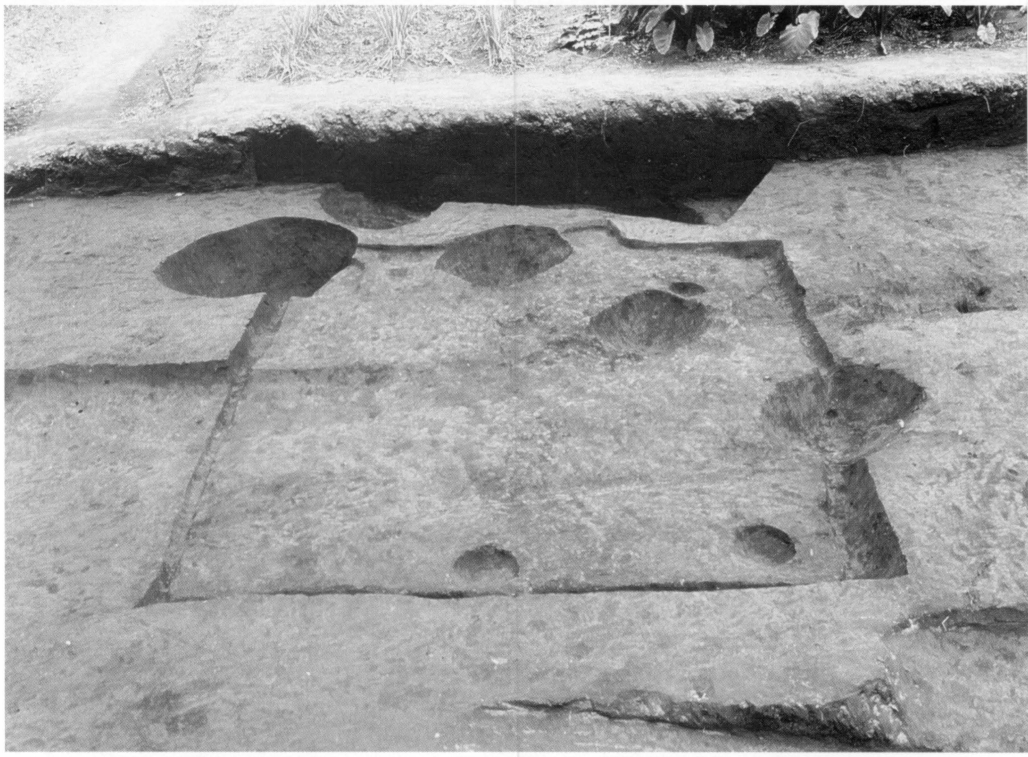
SI-002全景



SI-003全景

SI-003貯蔵穴内遺物出土状況

SI-004全景



SI-005全景

SI-006全景

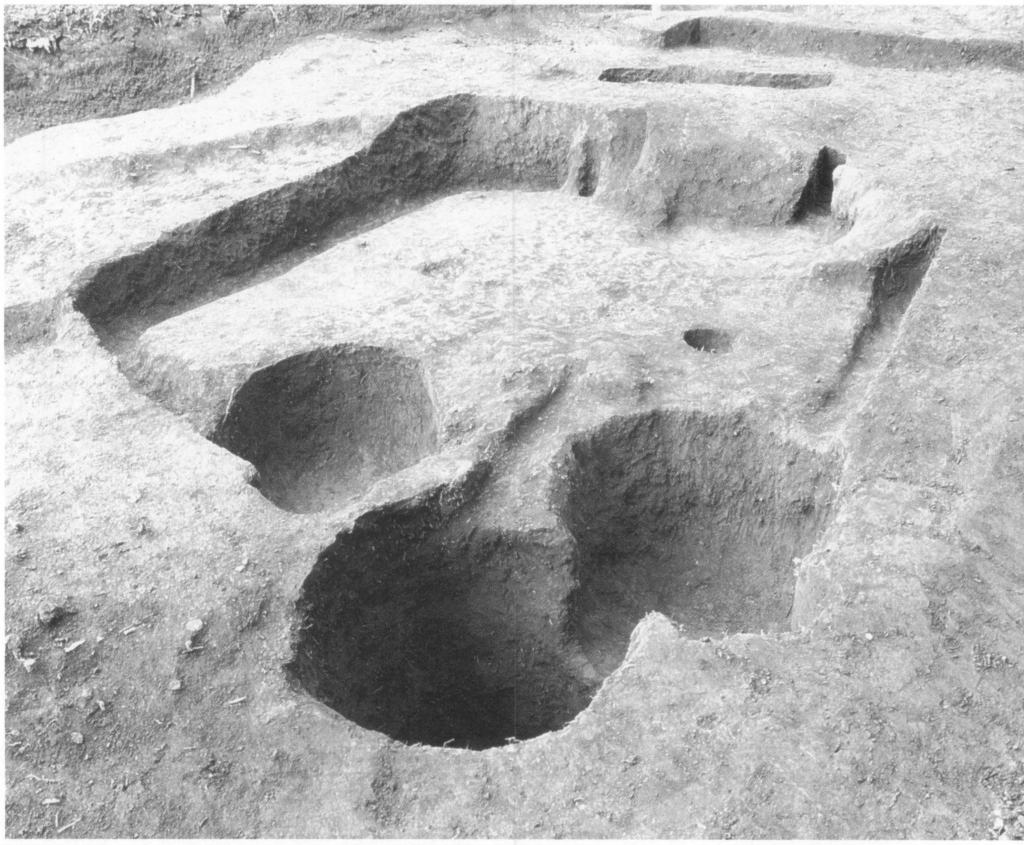
SI-007遺物出土状況

SI-007覆土土層断面

SI-007全景

SI-007炉跡１（左）
SI-007炉跡２（右）

SI-008遺物出土状況



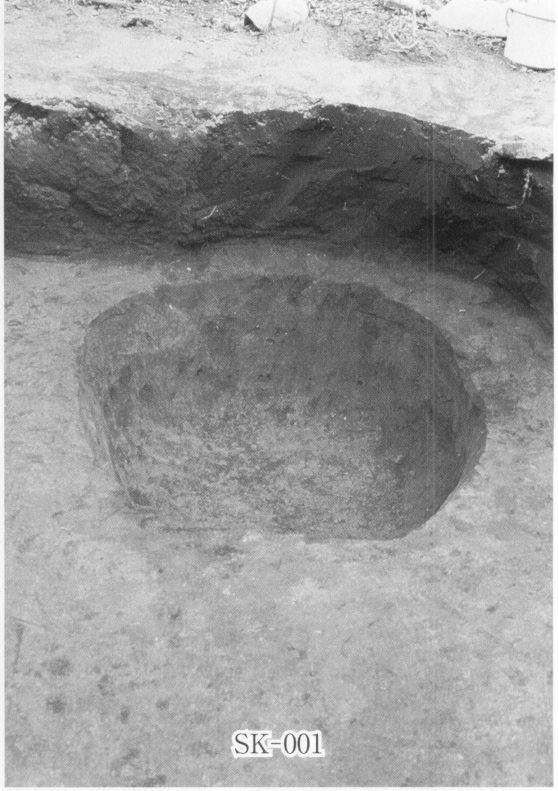
SI-008全景
SK-011～013

SI-008カマド内遺物
出土状況（左下）

SI-008カマド（右下）

図版8

SK-002～006・008

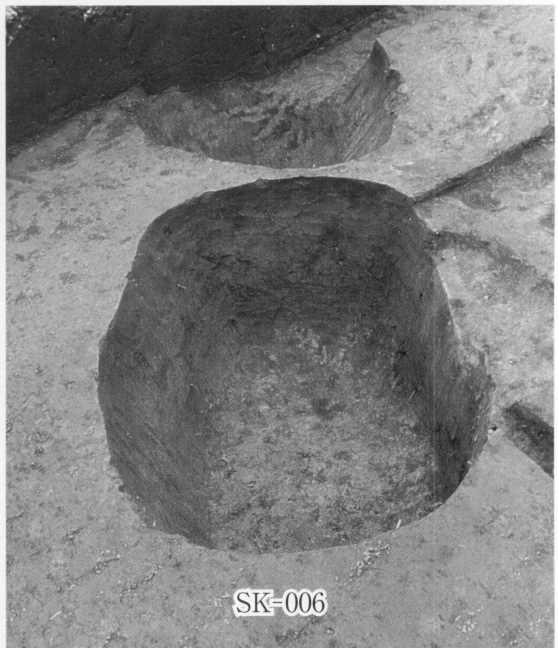


SK-001

ピット群，SD-008

SK-010

SD-001



SK-006

SD-002

SD-003・005

SD-006

SI-001-1
SI-001-2
SI-001-3
SI-001-4
SI-001-5
SI-001-6
SI-001-7
SI-001-8
SI-001-9
SI-001-10
SI-001-11
SI-001-12
SI-001-13
SI-001-14
SI-001-15
SI-001-16
SI-001-17
SI-001-18
SI-001-19
SI-001-20
SI-001-21
SI-001-22

SI-001遺物

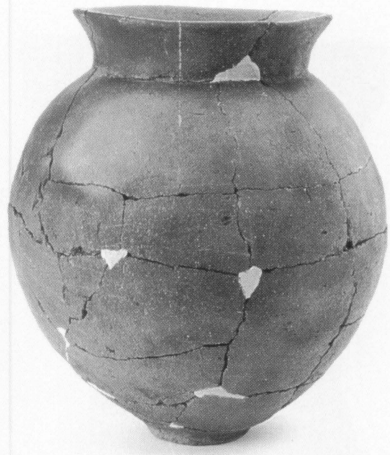
SI-001-24

SI-001-25

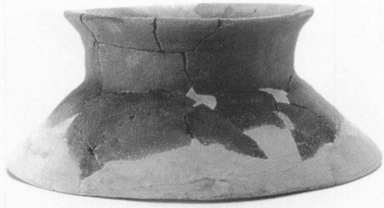
SI-001-27

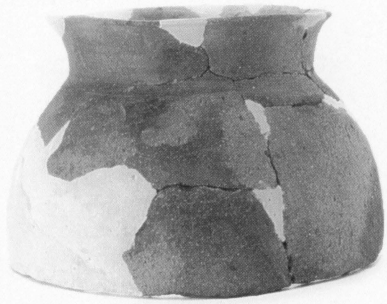
SI-001-28

SI-001-29


SI-001-30

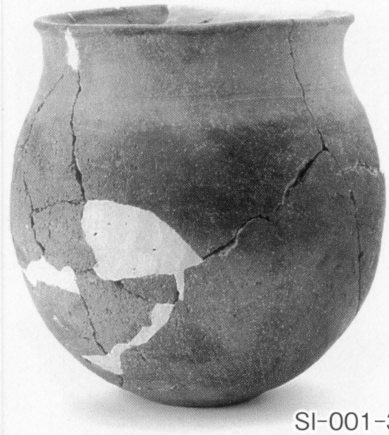
SI-001-31


SI-001-32


SI-001-33

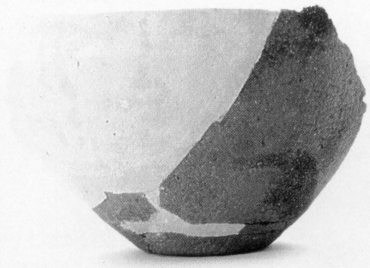
SI-001-35

SI-001-34


SI-001-36

SI-001-37

SI-001-38


SI-001-39

SI-001遺物

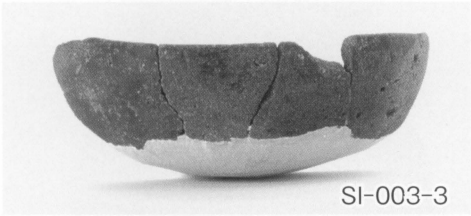
SI-001-40

SI-002-1

SI-002-5

SI-003-1

SI-003-2


SI-003-3

SI-003-4

SI-003-5

SI-003-6

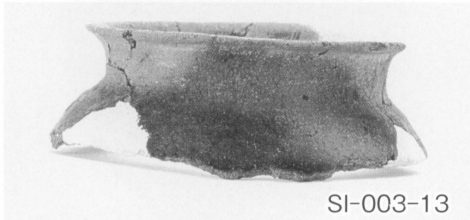
SI-003-7

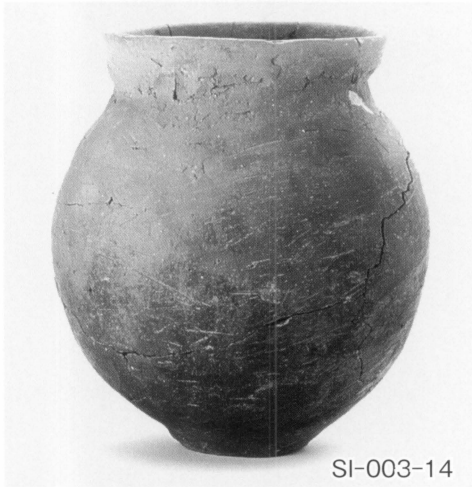
SI-003-8

SI-003-9

SI-003-11

SI-003-12


SI-003-13


SI-003-14

SI-003-18

SI-003-19

SI-004-2

SI-004-1

SI-004-23

SI-004-8

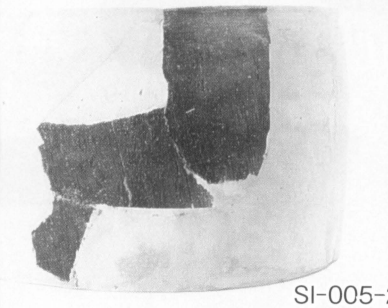
SI-001・002・003・004遺物

SI-004-9

SI-004-24

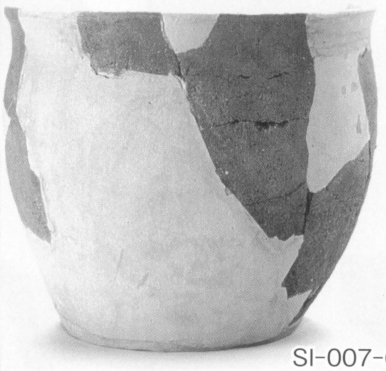
SI-004-28

SI-005-1

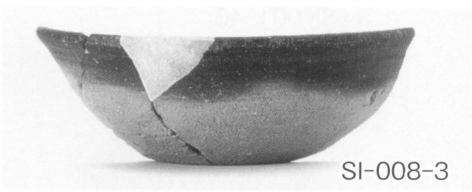

SI-005-2

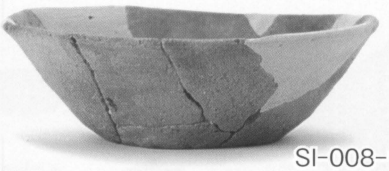
SI-007-4

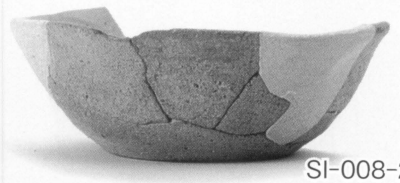
SI-007-5


SI-007-6

SI-007-8


SI-008-3

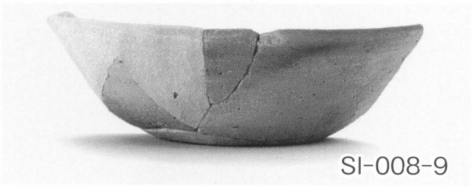

SI-008-1


SI-008-2

SI-008-6

SI-008-4

SI-008-5


SI-008-9

SI-008-7

SI-008-8

SI-008-13

SI-008-11

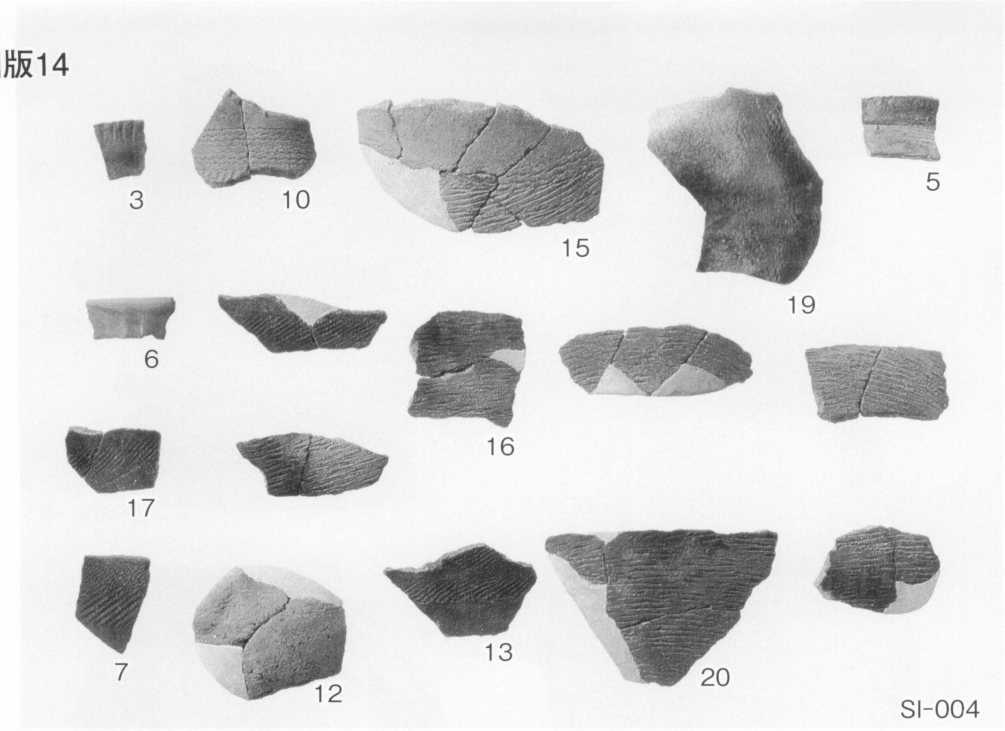
SI-007-12

SI-008-16

SI-008-18

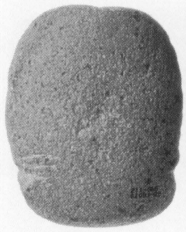
SI-008-19

SI-004・005・007・008遺物

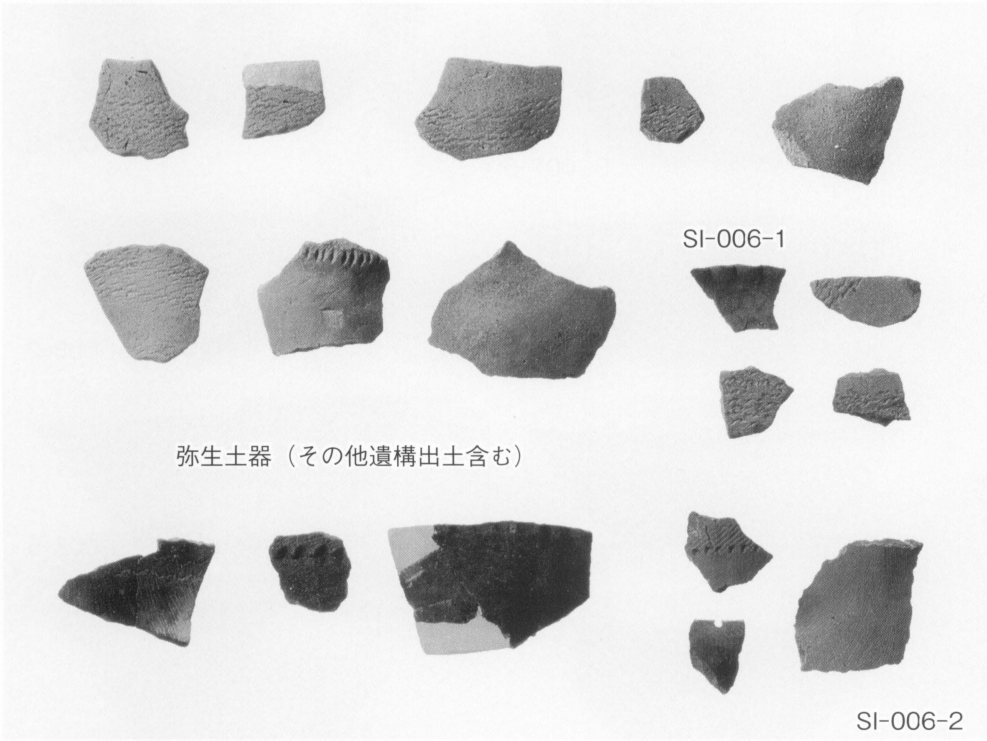


SI-004

SI-001-41



SI-003-25



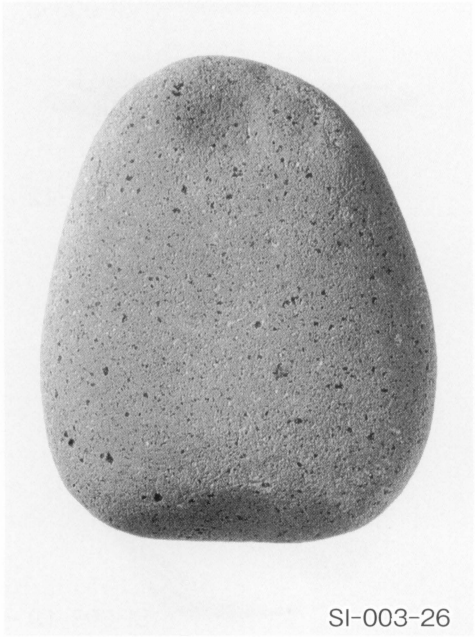
SI-006-1

弥生土器（その他遺構出土含む）

SI-006-2

SI-001-40

SI-001-42

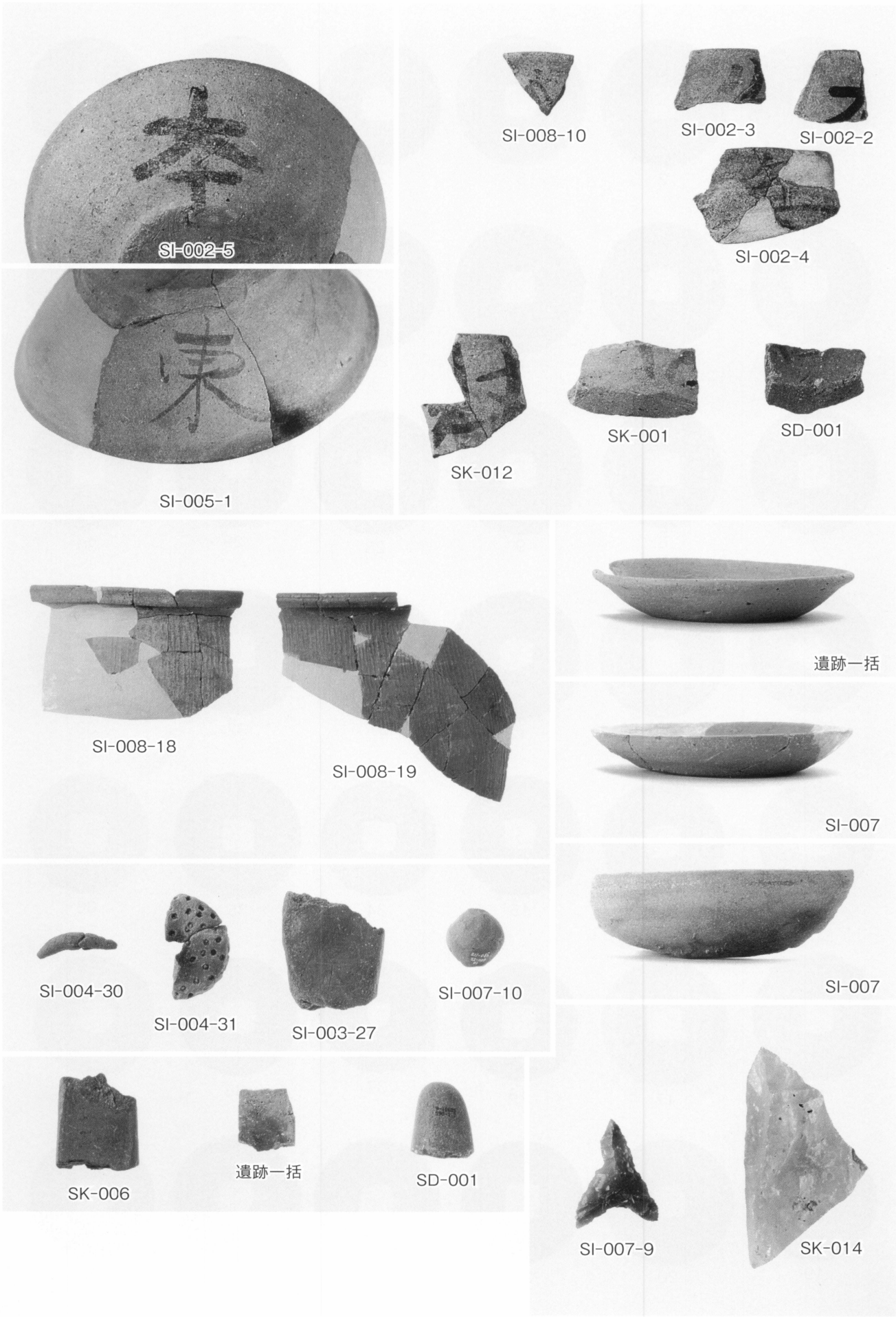


SI-003-26

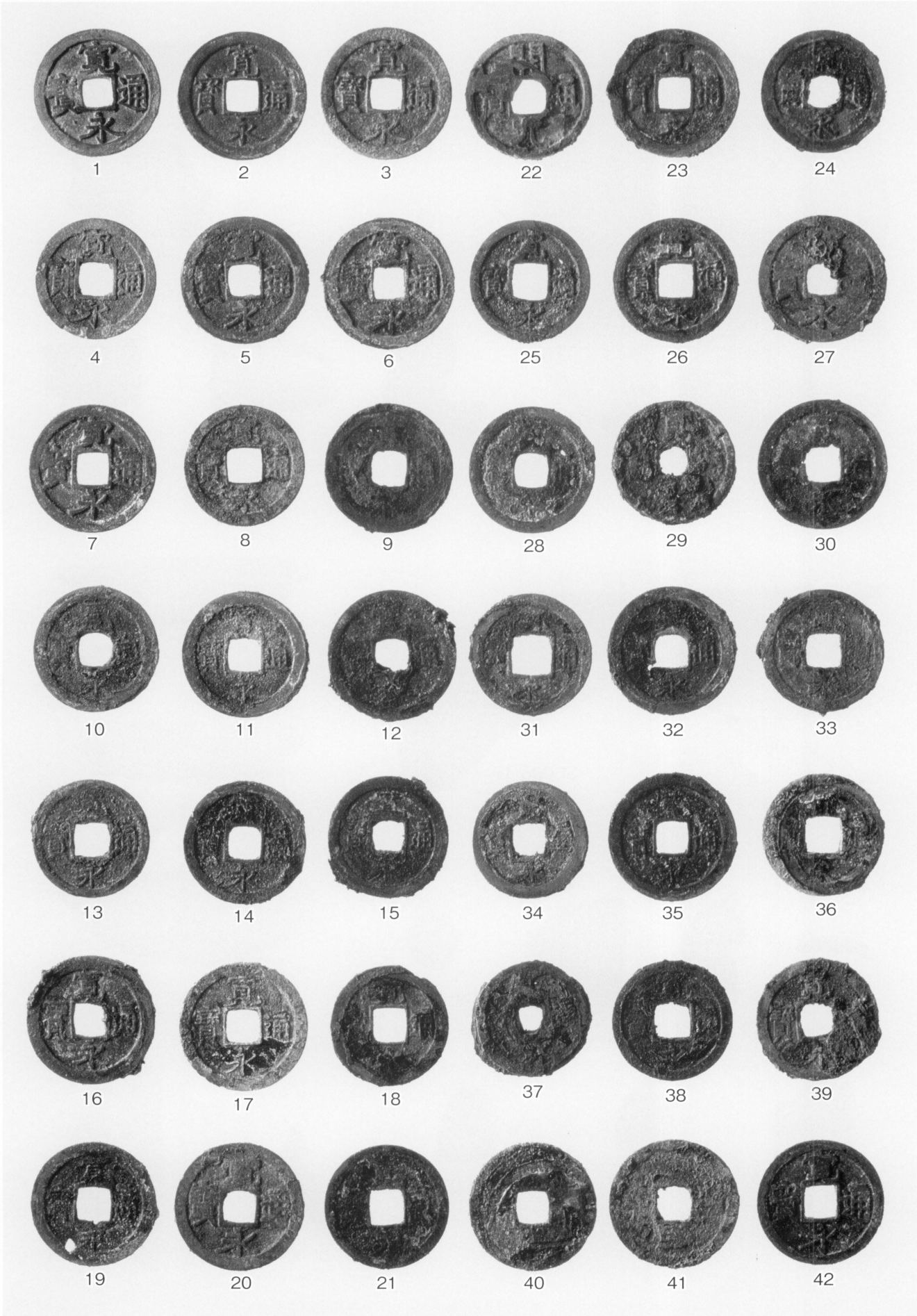
SI-004-32

SI-003-27

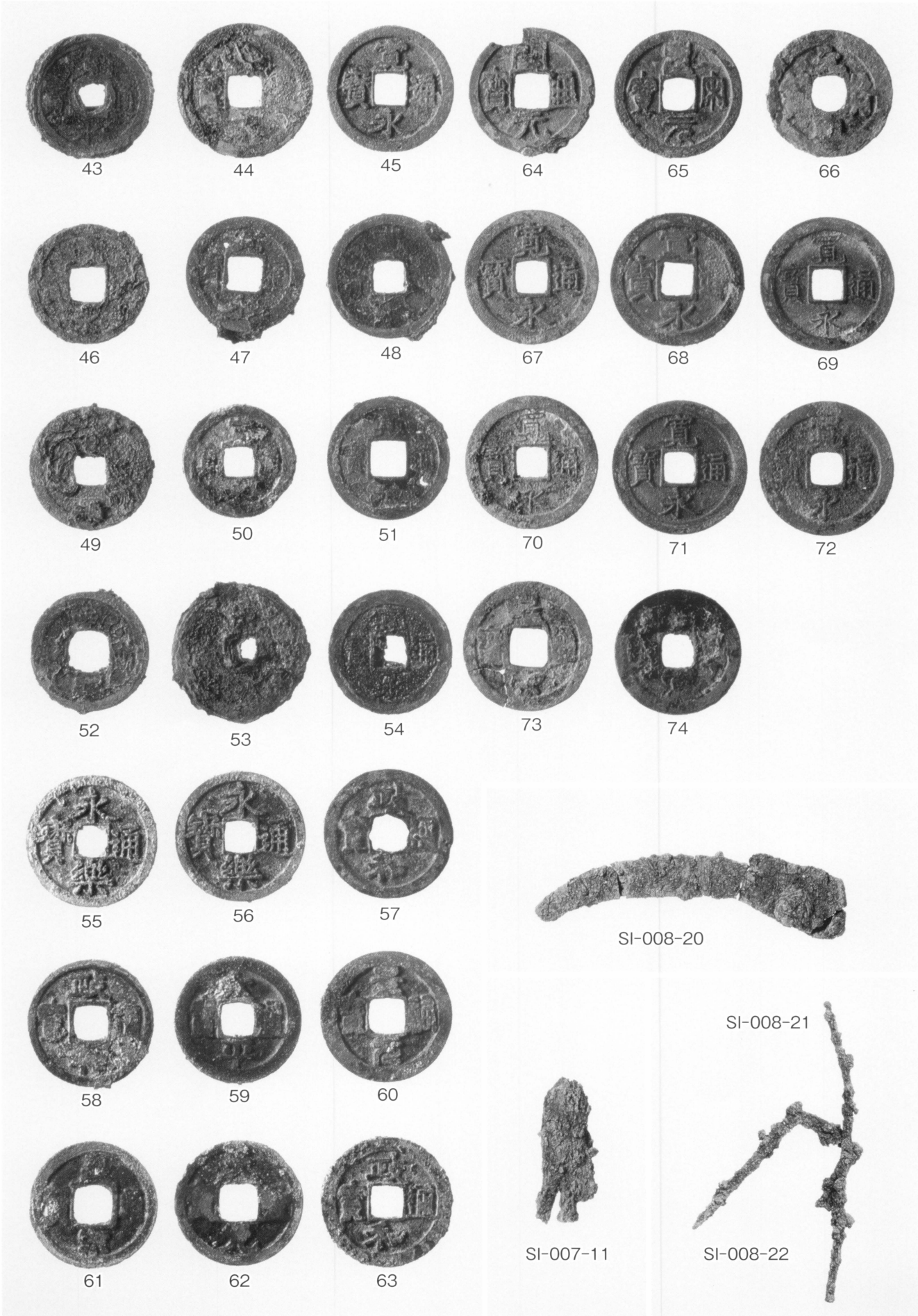
弥生土器，石器



墨書土器，須恵器，カワラケ，土製品，石製品


1
2
3
22
23
24
4
5
6
25
26
27
7
8
9
28
29
30
10
11
12
31
32
33
13
14
15
34
35
36
16
17
18
37
38
39
19
20
21
40
41
42

銭貨


43
44
45
64
65
66
46
47
48
67
68
69
49
50
51
70
71
72
52
53
54
73
74
55
56
57
SI-008-20
58
59
60
SI-008-21
61
62
63
SI-007-11
SI-008-22

銭貨，鉄製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	しゅようちほうどうなりたあじきせんちほうどうどうろかいりょうじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	主要地方道成田安食線地方道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書
副署名	成田市押畑広台遺跡
巻次	3
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第５６９集
編著者名	鳴田浩司
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　　TEL 043（424）4848
発行年月日	西暦　2007年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おしはたひろだい 押畑広台遺跡	なりたしおしはたあざひろだい 成田市押畑字広台 1706-3ほか	12211	065	35度 47分 53秒	140度 18分 24秒	20020701～ 20020731 20030107～ 20030131	1,300㎡	地方道道路改良に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
押畑広台遺跡	集落	弥生時代後期から 古墳時代前期 古墳時代後期 奈良・平安時代 中・近世	竪穴住居跡２ 竪穴住居跡３ 竪穴住居跡３ 土坑墓７，溝状遺構７，土坑１，土坑列１，ピット群１	弥生土器，土師器，土製品，石器 土師器，土製品 土師器・須恵器，鉄製品 カワラケ，銭貨，砥石	

千葉県教育振興財団調査報告第569集

主要地方道成田安食線地方道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

－成田市押畑広台遺跡－

平成19年３月23日発行

編　集　財団法人千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町１－１

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　株式会社　エリート情報社［印刷出版局］
成田市東和田415－10